

# 長岡京市文化財調査報告書

第 42 冊

2001

長岡京市教育委員会

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

# 長岡京市文化財調査報告書

第42冊

2001

長岡京市教育委員会

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡右京第675次調査

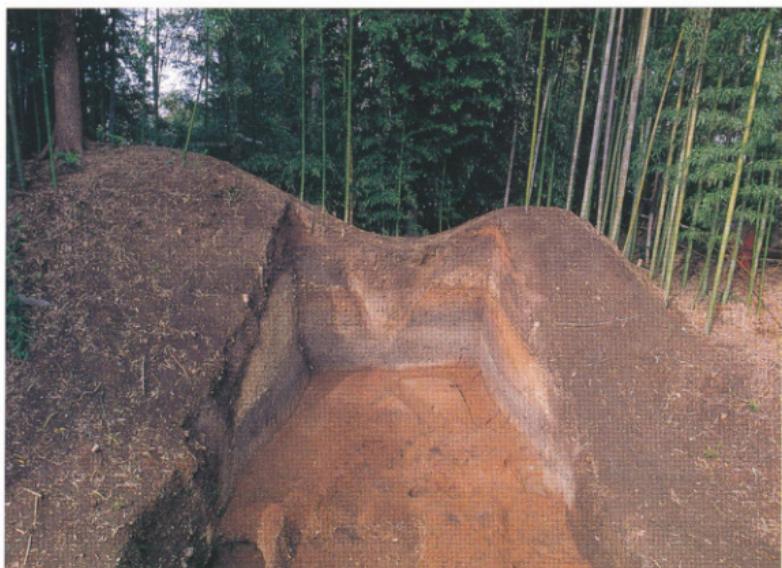
巻頭図版一



六条条間南小路（北から）



(1) 堀と土塁を開削する溝（南東から）



(2) 土塁の構築状況（南から）

## 序 文

希望と期待に満ちた21世紀の幕開けを迎えました。暮れの大晦日から元旦にかけまして本市でも「竹灯物語（たけとうものがたり）」と題してカウントダウンのイベントが行われました。会場となった八条ヶ池の水上橋に舞台が設けられ、ライトアップされた幻想的な空間の中で長岡京室内アンサンブル等による「古の都・長岡京」と題した演奏と朗読、北開田響太鼓による「新世紀への鼓動」と題した演奏などが披露され、多くの市民とともに希望ある新世紀にすることを誓いました。

歴史に目を向けてみると、今年度は新たに旧西国街道沿いの石田家住宅（神足二丁目）が国の有形登録文化財に、楊谷寺周辺地区が京都府文化財環境保全地区にそれぞれ指定されました。前者は古い街道筋の面影をもつ江戸時代末頃の町家で、後者は京都府指定文化財の庭園や仏像等がある楊谷寺周辺の景観を保全するものです。今回の指定は先人たちの暮らしや信仰の中で築いてきた民家や景観を保護し、次の世代に伝えていくうとするもので、本市が「地域の歴史に親しみ個性的な環境・景観づくり」をすすめる上で大きな意義をもつものと思います。

さて、ここに刊行します報告書は、国庫補助事業として平成12年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

開田四丁目では長岡京の道路跡（六条条間南小路）と両側溝が発見されました。側溝からは一般雑器に加え、祭祀用の特殊な土器が出上し、当時の土地利用を知る上でも注目されます。また、東神足二丁目では中世の勝龍寺城の土壘と堀跡等が検出され、その構造を明らかにする資料を得ることができました。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財團法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成13年3月

長岡市教育委員会

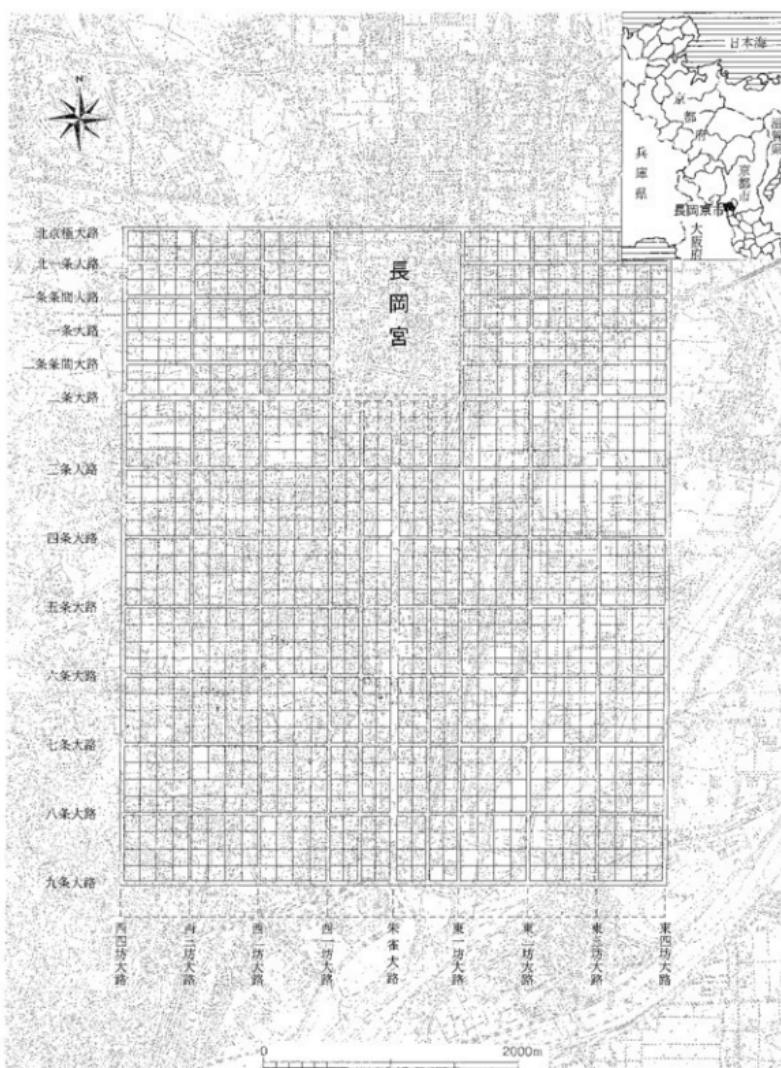
教育長 芦田富男

## 凡　　例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成12年度に国庫補助事業として実施した調査概要報告である。調査対象地は付表1のとおりで、その位置は第1図に示した。
  2. 長岡京跡の調査次数は、左京城、右京城ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』の旧字名をもとにした地区割りに従った。
  3. 長岡京跡の条坊復原は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原案に従った。
  4. 本書に使用する地形分類については、特に断らない限り「長岡京市地形分類図」「長岡京市史資料編一」(1991年)に従った。
  5. 長岡京跡の調査で使用している遺構番号は調査次数+遺構番号であるが、報告により調査次数を省略している場合がある。
  6. 本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年)に従って略記した。
  7. 各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。
  8. 本書の編集は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが行った。
  9. 現地調査および本書の作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。
- 遺物写真は、西大寺フォト 杉本和樹氏に撮影を依頼した。

付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第661次	7 ANNNM-2	長岡京市 友閑西山14-7他	2000年1月6日 2000年1月25日	99m <sup>2</sup>	友閑遺跡
長岡京跡右京 第675次	7 ANKNT-7	長岡京市 開田四丁目610-4	2000年6月1日 2000年6月30日	184m <sup>2</sup>	六条条間南小路 開田遺跡
長岡京跡右京 第681次	7 ANMKI-7	長岡京市 東神足二丁目7	2000年9月4日 2000年10月31日	88m <sup>2</sup>	神足遺跡 神足城跡 中世勝龍寺城跡



第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)

## 本文目次

第1章 長岡京跡右京第661次調査概要 .....	1		
1はじめに	2調査経過	3検出遺構	4出土遺物
5まとめ			
第2章 長岡京跡右京第675次調査概要 .....	7		
1はじめに	2調査経過	3検出遺構	4出土遺物
5まとめ			
第3章 長岡京跡右京第681次調査概要 .....	25		
1はじめに	2調査経過	3検出遺構	4出土遺物
5まとめ			

## 図 版 目 次

- 卷頭図版 1 六条条間南小路（北から）  
 卷頭図版 2 (1) 堀と土塁を開削する溝（南東から）  
 (2) 土塁の構築状況（南から）

### 長岡京跡右京第661次調査

- 図版 1 (1) 調査地全景（東から）  
 (2) 溝S D04遺物出土状況（西から）  
 (3) 溝S D04（西から）

### 長岡京跡右京第675次調査

- 図版 2 (1) 調査区全景-1（北から）  
 (2) 調査区全景-2（北から）  
 図版 3 (1) 六条条間南小路（南から）  
 (2) 溝S D67501（西から）  
 (3) 溝S D67502（西から）  
 図版 4 (1) 溝S D67502断面（東から）  
 (2) 自然流路S R67505土層堆積状況（南から）  
 図版 5 (1) 南西拡張区（東から）  
 (2) 調査区土層堆積状況（西から）  
 図版 6 (1) 調査前風景（南から）  
 (2) 調査後風景（南から）  
 図版 7 (1) 溝S D67502出土遺物-1  
 (2) 溝S D67502出土遺物-2  
 図版 8 (1) 溝S D67502出土遺物-3  
 (2) 溝S D67501・第5層出土遺物  
 図版 9 (1) 溝S D67501出土遺物  
 (2) 墨書き土器  
 (3) 軒丸瓦  
 (4) サヌカイト剝片  
 図版 10 (1) 繩文土器  
 (2) 石製品

**長岡京跡右京第681次調査**

- 図版 11 (1) 調査前の土壘（南から）  
(2) 1 トレンチ完掘状況（南東から）
- 図版 12 (1) 土壘の断ち割り状況（南から）  
(2) 1・2 トレンチ遠景（南東から）
- 図版 13 (1) 2 トレンチ上面の石礫（南東から）  
(2) 2 トレンチ下面の遺構全景（西から）
- 図版 14 (1) 井戸 S E 05全景（西から）  
(2) 2 トレンチ東壁の土層（西から）
- 図版 15 土師器皿-1
- 図版 16 土師器皿-2
- 図版 17 土師器皿-3
- 図版 18 瓦器・陶器・白磁・金属製品・土製品

## 挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000) ..... ■

### 長岡京跡右京第661次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 調査地土層図 (1/100)	2
第4図 検出遺構図 (1/100)	3
第5図 溝S D05実測図 (1/50)	3
第6図 掘立柱建物S B07実測図 (1/50)	3
第7図 溝S D04実測図 (1/50)	4
第8図 出土遺物実測図 (1/4)	5

### 長岡京跡右京第675次調査

第9図 発掘調査地位置図 (1/5000)	7
第10図 調査地土層図 (1/100)	9
第11図 検出遺構図 (1/100)	11
第12図 溝S D67502出土遺物実測図-1 (1/4)	14
第13図 溝S D67502出土遺物実測図-2 (1/4)	15
第14図 溝S D67501・第5層出土遺物実測図 (1/4)	16
第15図 線刻土器・墨書き土器実測図 (1/4)	17
第16図 瓦実測図・拓影 (1/3)	18
第17図 木製品実測図 (1/4)	19
第18図 繩文土器実測図・拓影 (1/2)	20
第19図 石製品実測図 (1/2)	21
第20図 調査地周辺における長岡京期の検出遺構 (1/500)	23

### 長岡京跡右京第681次調査

第21図 発掘調査地位置図 (1/5000)	25
第22図 勝龍寺城縄張復原図 (1/6000)	26
第23図 土塁・空堀の測量図と調査地点 (1/200)	27
第24図 1・2トレンチ各壁面土層図 (1/80)	29
第25図 土塁の調査 (南から)	31
第26図 1トレンチ検出遺構図 (1/100)	31

第27図 2トレンチ検出遺構図 (1/100) .....	33
第28図 井戸S E05実測図 (1/60) .....	33
第29図 堀S D01上面出土遺物実測図 (1/4) .....	34
第30図 堀S D01出土遺物実測図 (1/4) .....	35
第31図 土壘構築土出土遺物実測図 (1/4) .....	36
第32図 溝S D04出土遺物実測図 (1/4) .....	37
第33図 井戸S E05出土遺物実測図 (1/4) .....	37
第34図 2トレンチ出土中世土師器皿実測図-1 (1/4) .....	38
第35図 2トレンチ出土中世土師器皿実測図-2 (1/4) .....	39
第36図 2トレンチ出土中世土師器皿実測図-3 (1/4) .....	39
第37図 1・2トレンチ出土中世遺物実測図 (1/4) .....	40
第38図 2トレンチ出土弥生土器実測図 (1/4) .....	40
第39図 井戸S E05出土木製品実測図 (1/8・1/4) .....	40
第40図 石製品・銅製品実測図 (1/2) .....	41
第41図 石器・剥片実測図 (1/2) .....	41

## 付 表 目 次

付表 1 本書報告調査一覧表.....	ii
付表 2 六条条間南小路調査成果一覧表（第VI座標系）.....	23
付表 3 報告書抄録.....	43

# 第1章 長岡京跡右京第661次調査(7 ANNNM-2地区)調査概要

## —長岡京跡右京七条三坊十町、友岡遺跡—

### 1はじめに

- 1 本報告は、2000年1月6日から2000年1月25日まで、京都府長岡市友岡西山14-7他において実施した長岡京跡右京第661次調査に関するものである。調査面積は99畠であった。
- 2 本調査は、長岡京跡に関する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。
- 3 発掘調査は、平成11年度国庫補助事業として長岡市教育委員会が主体となり、財団法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査員の中島皆夫が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は中島が行った。

### 2調査経過

調査地は阪急長岡天神駅の南西約0.8kmに位置する。調査地の周辺は府道沿いにあたるため、現在では宅地化が進みほとんど緑地が残されていない。地形的には北西から延びる低位段丘上に立地し、南東および南西方向へ緩やかに傾斜している。しかし、現況ではこのような旧地形の微妙な変化を読みとることが困難である。



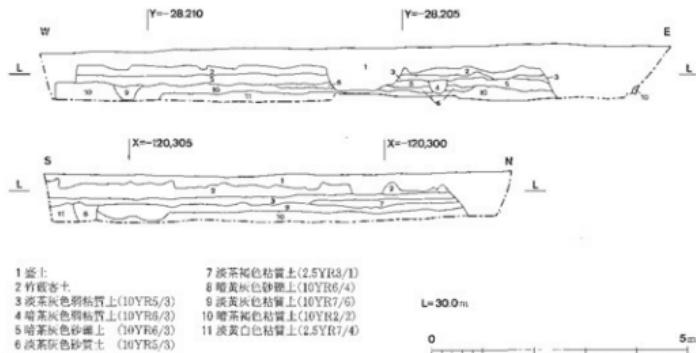
調査地は長岡京跡および友岡遺跡に含まれ、南約300mには鞆岡庵寺が存在している。鞆岡庵寺は寺域などが明らかでなく当地との直接的な関連を検討する段階にない。長岡京の条坊復原で右京七条三坊十町にあたる当地周辺は、これまで長岡京期の遺構検出例が少なく宅地地域の土地利用や性格が明らかでなかった。このため、調査では建物など宅地利用に関わる遺構の確認が期待されていた。一方の友岡遺跡は縄文時代からの営みが確認できる集落遺跡で、調査地が位置する遺跡北西部では中近世の遺構遺物が数多く確認されており、当地でも中近世集落に関連する調査成果が得られるものと考えられていた。また、調査地は遺跡推定範囲の北西縁辺部にあたるため、友岡遺跡の広がりを検討する上でも重要な場所と言える。さらに、当地の西には伊賀寺遺跡が推定されており、右京第324次調査では平安時代の掘立柱建物群が確認されている。

調査は当初残土置場の確保が困難であったことから、調査区西半の表土などを重機により除去し順次人力による掘削を開始した。その後、残土置場として充分な範囲が確保されたため、再度重機を導入し残土の除去と残されていた調査区東半の掘削を行った。なお、第VI座標系による調査区の中央座標値はY=-28,206、X=-120,302である。

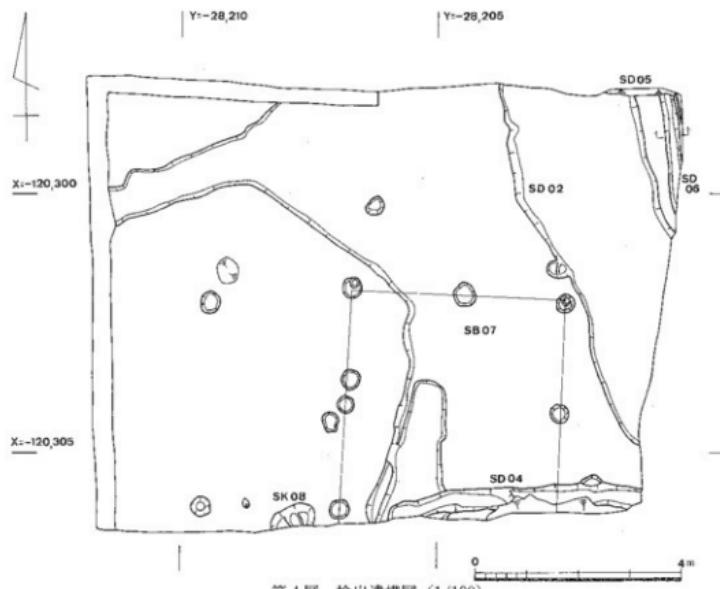
### 3 検出遺構

#### (1) 基本層序

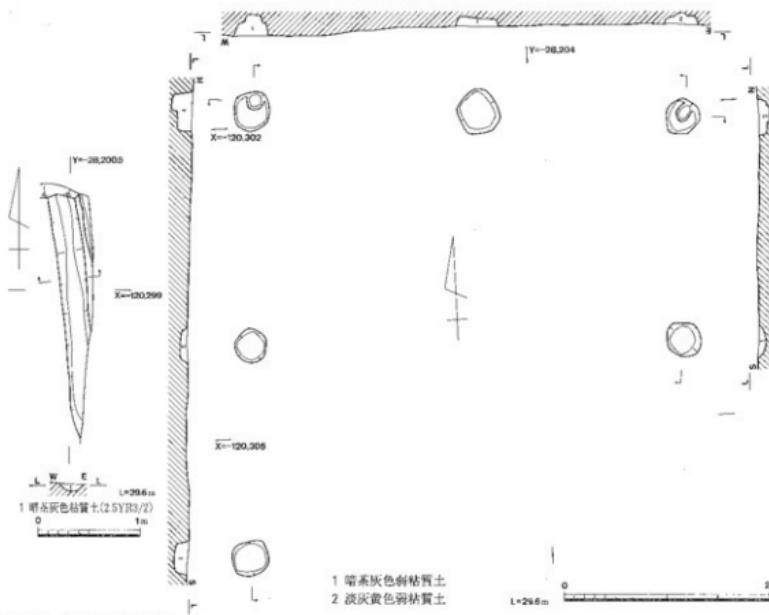
調査地には厚さ0.2~0.5mの盛土が施されているが、その厚さは調査区内を見る限り北東側ほど厚い傾向にある。調査区の北辺中央、北西隅、北東隅、南東隅付近などには搅乱坑が認められた。これらは大きく広がるものではなく、調査区内の遺構面はほぼ完全な状態で残されていた。盛土の下には厚さ0.1~0.3mの竹藪客土が認められるが、1946年に撮影された航空写真によっても調査地から南側に竹藪が広がっていることを確認できる。竹藪客土より下は茶灰色系の粘質土が0.2m前後の厚さで堆積し、黄灰色ないし茶褐色を呈する地山に至る。地山の高さは調査区の北西隅付近で標高29.8mを測り、南側に向かって緩やかに傾斜していた。



第3図 調査地土層図 (1/100)



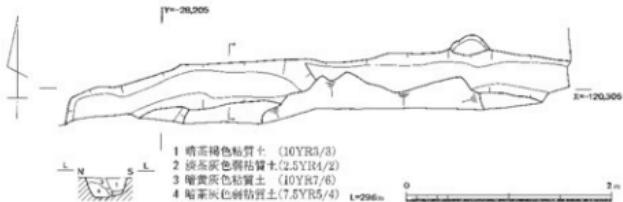
第4図 検出遺構図 (1/100)



第5図 溝SD05実測図  
(1/50)

1 墓系灰色粘質土 (25YR3/2)  
2 淡灰黄色弱粘質土

第6図 掘立柱建物SB07実測図 (1/50)



第7図 溝SD04実測図 (1/50)

## (2) 検出遺構

本調査において検出した遺構には溝3条、掘立柱建物1棟、土坑1基と流路状の砂礫土堆積遺構がある(第4図)。また、まとまりとして捉えることができない柱穴を7基確認している。

**溝S D05(第5図)** 調査区の北東隅で確認した素掘り溝で、後述する溝S D06と平行して掘削されていた。溝の規模は幅0.2~0.3mで深さ約0.1mを測り、その方向は真北に対して約5°西へ振っている。埋土には遺物が含まれていなかったが、遺構の重複関係から流路状遺構S D02より新しい時期の遺構であることが分かった。

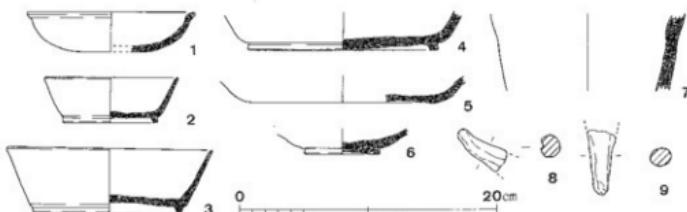
**溝S D06** 調査区の北東隅で確認した素掘り溝で、規模や時期は分からぬものの溝S D05と同時に掘削されたと考えられる。

**掘立柱建物S B07(第6図)** 調査区のほぼ中央部で確認した掘立柱建物である。南北2間以上、東西2間の南北棟であり調査区外の南側へさらに続いている。梁間、桁行とともに柱間は2.1m前後を測り、建物の棟方向は真北に対して3°程度東へ振っていた。柱穴は不整形な円形を呈し、直径0.4m前後で深さ0.3mまでを測る。柱穴に土師器、瓦器の細片が含まれていることから掘立柱建物の時期は中世頃と考えられる。また、流路状遺構S D02との重複関係からは、掘立柱建物S B07がより新しい時期のものであることが分かった。

**流路状遺構S D02** 調査区東半部の茶灰色砂礫土ないし砂質土に覆われていた範囲を流路状遺構とした。流路状遺構は東端が調査区外であるために幅を明らかにできなかつたが、深さ0.4m前後で浅くなだらかな底面を形成している。埋土の茶灰色土には土師器、須恵器など平安時代中期の遺物が含まれているが、その数は多くない。遺構の重複関係から流路状遺構は溝S D05・06、掘立柱建物S B07に先行し、溝S D04より新しい時期のものであることが分かる。

**溝S D04(第7図)** 調査区の南東部において検出した東西方向の素掘り溝で部分的に搅乱坑によって削平されている。溝S D04の輪郭は流路状遺構S D02の埋土を完全に取り去った段階で確認したが、検出面における溝の規模は幅0.3~0.4m、深さ0.2m前後を測る。溝は調査区外の東側へさらに延びるが、西端は調査区南壁の中央部で終わっている。溝の埋土には長岡京期の土師器、須恵器、製塙土器、土馬などが含まれており、出土遺物の量は他の遺構に比べて多い。

**土坑S K08** 土坑S K08は調査区の南辺中央部で確認した。輪郭を完全に明らかにできなかつたが、土坑は長軸が1m程度でその平面形態が不整形な橢円形を呈するものと考えられる。埋土からは土師器の細片が出土しただけで、所属時期を明らかにできなかつた。



第8図 出土遺物実測図 (1/4)

柱穴 調査では掘立柱建物や柵などのまとまりとして捉えることができない柱穴を7基確認している。各柱穴の形態や埋土には共通性や関連性を見出すことができず、また、遺物も含まれていなかった。

#### 4 出土遺物

本調査では土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、製塙土器、土馬などの遺物が整理箱にして1箱出土した。出土遺物は細片が多く図示できるものが限られていた。また、第8図の1~4、7~9は溝S D04から、5・6が流路状遺構S D02から出土したもので、他の遺構の出土遺物には図示できるものがない。

溝S D04の出土遺物には土師器の椀、甕、壺C(1)、須恵器の杯B(2~4)、皿、甕、製塙土器(7)、土馬(8・9)がある。1は口径約13cmで器高が約3cmを測る。体部の外面は調整がなされておらず不明瞭な指頭圧痕を残している。須恵器杯Bには口径が10.4cmの杯B I(2)、口径16cmの杯B III(3)、口径20cm前後と考えられる杯B V(4)がある。このうち3はほぼ完形に近い個体であり、内部に土馬の破片(8・9)が納められた状態で出土した。7の製塙土器は破片であるが、胴部の径が15cmを測る大型のものである。内外面とも著しく摩滅しているため布目圧痕や指頭圧痕などは観察することができなかった。土馬は尾部(8)と脚部(9)の破片が出土した。前述したように8・9は杯B(3)に納められた状態で出土したことから、同一個体であった可能性が考えられる。

流路状遺構S D02では土師器の甕、須恵器の皿A(5)、甕、綠釉陶器椀(6)など出土している。5の須恵器皿Aは底部径が約15cmを測る大型のものである。6の綠釉陶器椀は高台径が5.8cmを測る。内外面の器壁が摩耗しているため明瞭ではないが、内面の一部には緑黄色の釉薬が残存していた。

掘立柱建物S B07の柱穴からは土師器、瓦器の破片が出土している。土師器には器形を特定できるものがないが、瓦器では椀の口縁部が数点確認できた。瓦器椀は形態や調整の特徴から13世紀前半期のものと考えられる。

土坑S K08からは土師器の破片が数点出土している。しかし、いずれも細片であり器形の特定や時期の検討を行うことができなかった。

## 5 まとめ

今回の調査では長岡京期の東西溝、平安時代頃と考えられる流路状造構、鎌倉時代の掘立柱建物などを検出することができた。

本調査は長岡京の右京七条三坊十町における最初の発掘調査であり、造構や遺物の性格をこの宅地内で位置付けることが困難である。また、右京七条三坊に推定される範囲では17件の発掘調査が行われているが、このなかで長岡京期の造構を確認したのは右京第70次調査<sup>(4)</sup>に限られている。右京第70次調査では西三坊坊間西小路、七条大路の側溝と考えられる溝が確認されたが宅地域に推定される範囲では全く造構は確認されなかった。本調査で検出した長岡京期の溝S D04の性格については今後の周辺調査を待って検討しなければならないだろう。また、長岡京期の遺物についても7件の発掘調査で出土しただけで、同時期の遺物が大量に出土した例もない。

本調査地周辺で平安時代の造構が検出された地点は、本調査地から南東の炳岡庵寺推定地にかけて比較的まとまった分布が認められる。この分布傾向は鎌倉時代においても同じであり、伊賀寺遺跡および友潤遺跡の推定範囲内に古代末から中世にかけて継続して集落が営まれたことを示している。

注1) 繪 伸一郎「右京第118次調査概報」『長岡京市センターニュース』昭和57年度 1983年

2) 木村泰彦「右京第324次調査概報」『長岡京市センターニュース』昭和63年度 1990年

3) 『長岡京市 空からの散歩』長岡京市教育委員会 1992年

4) 中尾秀正他「右京第70次調査概要」『長岡京市報告書』第9号 1982年

## 第2章 長岡京跡右京第675次（7 ANKNT-7地区）調査概要

### —長岡京跡右京六条二坊十一・十二町、開田遺跡—

#### 1はじめに

- 1 本報告は、2000年6月1日～2000年6月30日まで、長岡京市開田四丁目610-4において実施した、長岡京跡右京六条二坊十一・十二町および開田遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は184m<sup>2</sup>である。
- 2 本調査は、六条条間南小路ならびに当地周辺に存在が推定されている長岡京の「西市」に関する資料を得ることを主な目的として実施した。
- 3 調査は、平成12年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター総括主査 山本輝雄、嘱託調査員 小畠佳子が担当した。
- 4 調査の実施にあたり、土地所有者をはじめとする関係者の方々には、種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本文中の遺構番号は正式なものであるが、遺構図中では最初3桁の調査次数を省略した。
- 6 本報告の執筆・編集は小畠が行った。



第9図 発掘調査地位置図 (1/5000)

## 2 調査経過

調査地は、阪急長岡天神駅の南東300mの犬川によって形成された後背低地上に位置しており、付近での標高は18.3m前後を測る。周辺は市街地化の著しい駅前地区にあって、今もなお耕作地が数多く残っている地域である。当地も數年前までは畠地として利用されていたようだが、調査直前は休耕状態にあった。周辺ではこれまでに多くの発掘調査が行われており、特に長岡京の六条条間南小路に関する成果が著しく挙げられている。<sup>(注1)</sup> なかでも右京第565次調査では、六条条間南小路と西二坊坊間小路の交差点部分が検出されたほか、西二坊坊間小路東側溝にかかる橋脚が確認された。しかしながら、付近に推定される長岡京の「西市」に関連する遺構、遺物は現在のところ確認されていない。

また、調査地の北東150mの旧小字名「東塚本」では塚本古墳が発見されており、当地の旧小字「西塚本」にも古墳と伝承される一角があることから、古墳時代についての成果も期待されるところである。<sup>(注2)</sup>

調査では、まず建築予定地内に東西7m、南北24mの調査区を設定し、6月1日より作業を開始した。また西接する敷地内に古墳と伝承されているマウンドが存在しており、その真相を追究するために調査区を一部拡張した。調査は、埋め戻しも含め6月30日に終了した。

## 3 検出遺構

調査地における層序（第10図）は、旧来畠地として利用されていたこともあって耕作土等の水平堆積が基本となっていた。まず地表下0.5mまで耕作土である暗灰褐色土（第1層）と茶灰色土（第2層）、床土の暗茶褐色粘質土（第3層）が堆積し、長岡京期の遺物包含層である黒灰色砂質土（第5層）がそれに続く。第5層は調査区西端ではほとんど認められないが、東に行くにしたがって厚みを増し、東壁では0.1mの堆積を確認した。これは、第5層下に広がる灰白色砂礫（第22層）の上面が東に向かって下がる当地の地形的な状況に起因しているものと考えられる。第5層を取り除くと北半では黒色粘土（第16層）、南半では先述の第22層が現れる状況であった。この2層は色調・質感共に大きく異なる土層であるが、いずれも自然流路の堆積層である。

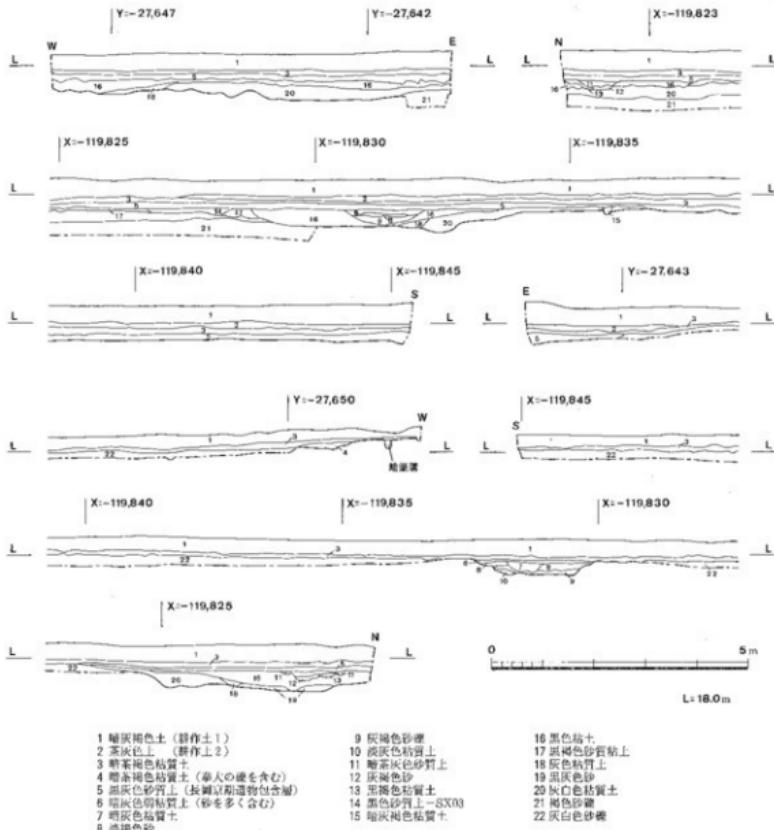
遺構はすべて長岡京期の遺物包含層である第5層を除去した段階で検出された。検出面での標高は、西で17.9m、東で17.6mである。本調査で検出された遺構は、長岡京期の六条条間南小路両側溝（S D67501・02）、六条条間南小路と六条二坊十二町の宅地を画する柵（S A67506・07・08）、縄文時代～古墳時代前期にかけての旧流路（S R67505）などがある。以下、時代の新しいものから順に説明する。

### [長岡京期の遺構]

六条条間南小路北側溝 S D67501 調査区北端に位置する。調査では長さ7.7m分が検出された。このうち西側6.5m分の南肩にはテラス状の落ち込みが付随している。まず、溝の幅は西端で1.5m、東端で1mを測り、西へ進むに従って広くなる傾向が認められる。深さはテラスまでが0.05

m、底までが0.2mである。溝底は平坦を意識して掘られているが、ベース層である旧流路S R 67505埋土の黒色粘土が極めて軟弱なため、足跡状の窪みが無数に存在した。埋土は上から暗茶灰色砂質土、灰褐色砂、黒灰色粘質土。基本的に砂とシルト層で構成されており、流水の頻繁さを窺わせる。調査時においても湧水は著しかったが、このことが幸いし木製品の残存状況は非常に良かった。なお、溝の中心座標は第VI座標系でY=-27,645で、X=-119,821.8である。

六条条間南小路南側溝S D 67502 調査区のほぼ中央に位置するもので、長さ7.4m分が検出された。溝幅は、西端で2.3m、東端で1.5mを測り、西へ行くほどに広くなる傾向がある。断面形態は、西では底を平坦に掘り上げているが、東では底の面が不明瞭になり、U字形を呈するようになる。埋土は砂を多く含む暗灰色弱粘質土、暗灰色粘質土、淡褐色砂、灰褐色砂砾、淡灰色粘質土の5層で構成されている。暗灰色粘質土は溝西半でのみ認められる層、淡灰色粘質土はベー



第10図 調査地土層図 (1/100)

スの灰白色砂礫の崩壊土を多く含む層である。全体的に砂が主体となっており、北側溝同様流水が頻繁にあったものと推定される。南側溝からは土器類の出土量が非常に多く、器種のバリエーションにも富んでいる。主な遺物には軒丸瓦、須恵器の淨瓶、ミニチュア壺、土師器の巻書人面壺などがある。木製品では横櫛、斎弔などが出土している。なお、溝の中心座標はY=-27,645で、X=-119,831.4。両側溝の溝心間の距離は9.6mを測る。

**六条条間南小路路面の遺構** 当小路は、先述の通り下層遺構である自然流路 S R 67505の堆積層の上に構築されているため、路面及び側溝のベース層は非常に軟弱であった。このため路面の表面精査を試みたところ、不定形なぬかるみ状の遺構、動物や人間の足跡と思われる痕跡が無数に認められ、当時の往来の様子がしのばれる。このうちにはっきりと輪郭が捉えられたのは、第11図に示した S X 67503・67504と足跡群のみである。S X 67504は細長く線的に延びる落ち込みで、牛車等の轍跡と推定される。S X 67503は、S X 67504から延びる轍跡に不定形な窪みが複合したものである。埋土からは長岡京期の土師器片が出土している。

**柵 S A 67506・67507・67508** 溝 S D 67502の南肩から0.8m南に位置する柵列で、計3条検出された。3条の柵はいずれも東西1間分が検出され、柱間寸法は3.3mを測る。柱穴は0.3~0.4mの円形掘形で、深さは0.3m前後である。柱穴の中には柱根を残すものもあった。これらの柵列は、柱穴が掘られている場所や柱間が皆一様であることから、2度の建て替えを示唆するものと考えられる。しかしながら、柵列3条の前後関係などは調査では解らなかった。

#### [古墳時代～縄文時代の遺構]

**自然流路 S R 67505** 調査区内では地山は検出されず、全体が自然流路の流域又は川原状の堆積であった。このS R 67505は、その内の一つの時期の流路を示す資料であると考えられる。S R 67505は、調査では南西肩が検出されたのみであるため、幅をはじめ規模は判然としない。埋土は、検出面から深さ約0.3mまでが黒色を呈する湿地状堆積で、この層にはヨシのような管状で節のある植物遺体が多く含まれる。これより下層は、砂層と粘土層の互層であり、激しい湧水を伴った。出土遺物は量的には非常に少なく、上の黒色粘土層からは古墳時代前期と推定される土師器の小片が数点認められた。以下からは縄文土器や磨製石斧など縄文時代の遺物のみが出土した。

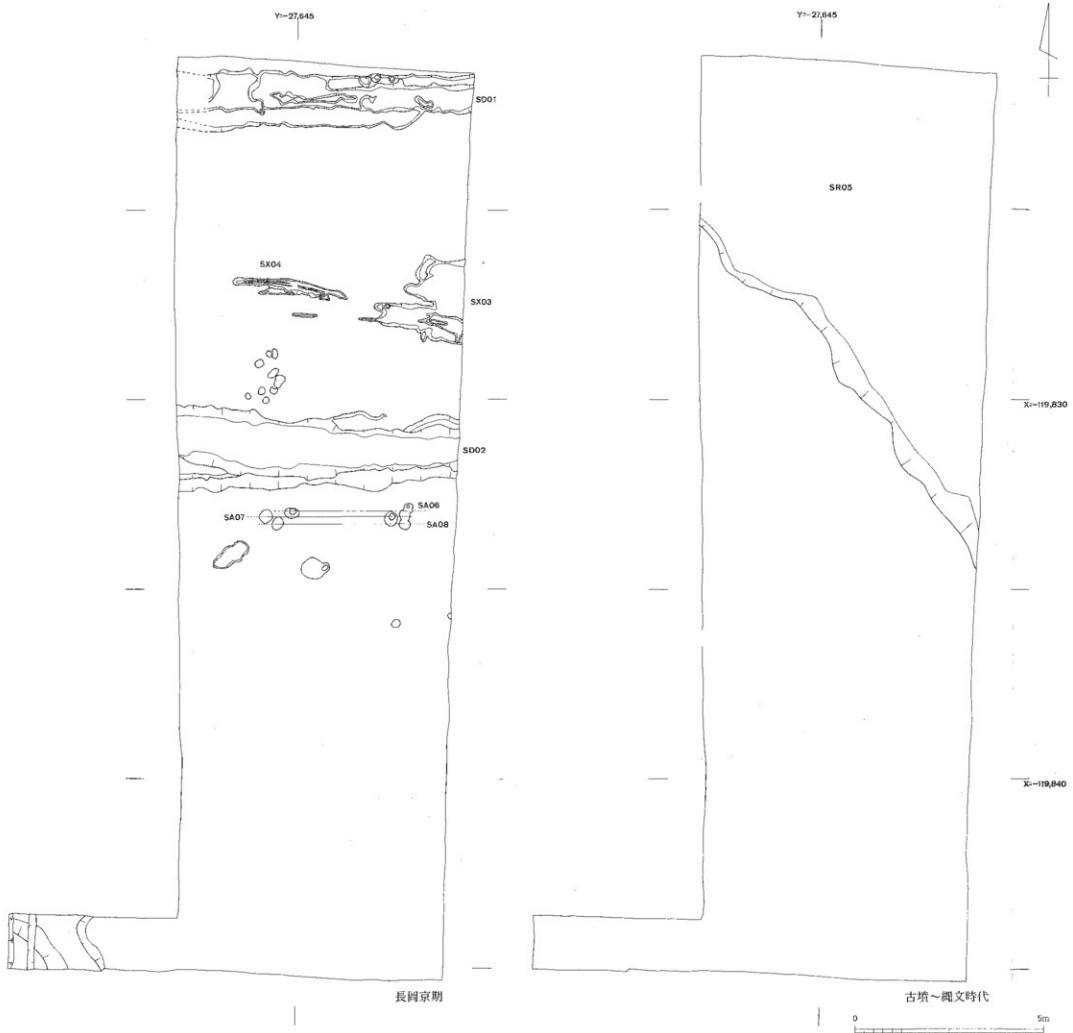
なお、流路の調査は、部分的に深さ0.8mまで行ったが、湧水と壁面崩落の危険性のため以下の掘り下げは断念した。

## 4 出土遺物

今回の調査では、縄文時代～長岡京期にかけての遺物が、整理箱に換算して5箱分出土した。出土地点別では、六条条間南小路の両側溝出土の遺物がその大半を占め、自然流路 S R 67505出土遺物が次いで多い。しかしながら、包含層など遺構に伴わない遺物は比較的少なかった。

#### [長岡京期の遺物]

溝 S D 67502出土遺物（第12・13図）



第11図 挿出遺構図 (1/100)

総遺物数における半数以上がこのSD67502から出土したものである。器種別では土師器が須恵器より多く、土師器の中でも椀・皿などの供膳形態が顕著に見受けられる。ただ、量は多いものの細片がほとんどであるため図示できたものはさほど多くない。

まず土師器には、椀A、杯A、杯B、皿A、皿C、壺B、壺C、壺E、甌、高杯、羽釜、土馬、ミニチュア竈、製塩土器、竈がある（第12図）。1～4は椀Aである。このうち3はほぼ完形の資料である。1～3は内面をナデ、外面全体をヘラケズリするc手法で仕上げられている。また2・3の内面にはハケメを施し、それをナデ消した痕跡が認められる。4は内面ナデ、外面は端部のみナデ、その他はヘラミガキにより調整されている。1～4の法量は口径11.3～12.9cm。器高3.1～4.0cm。

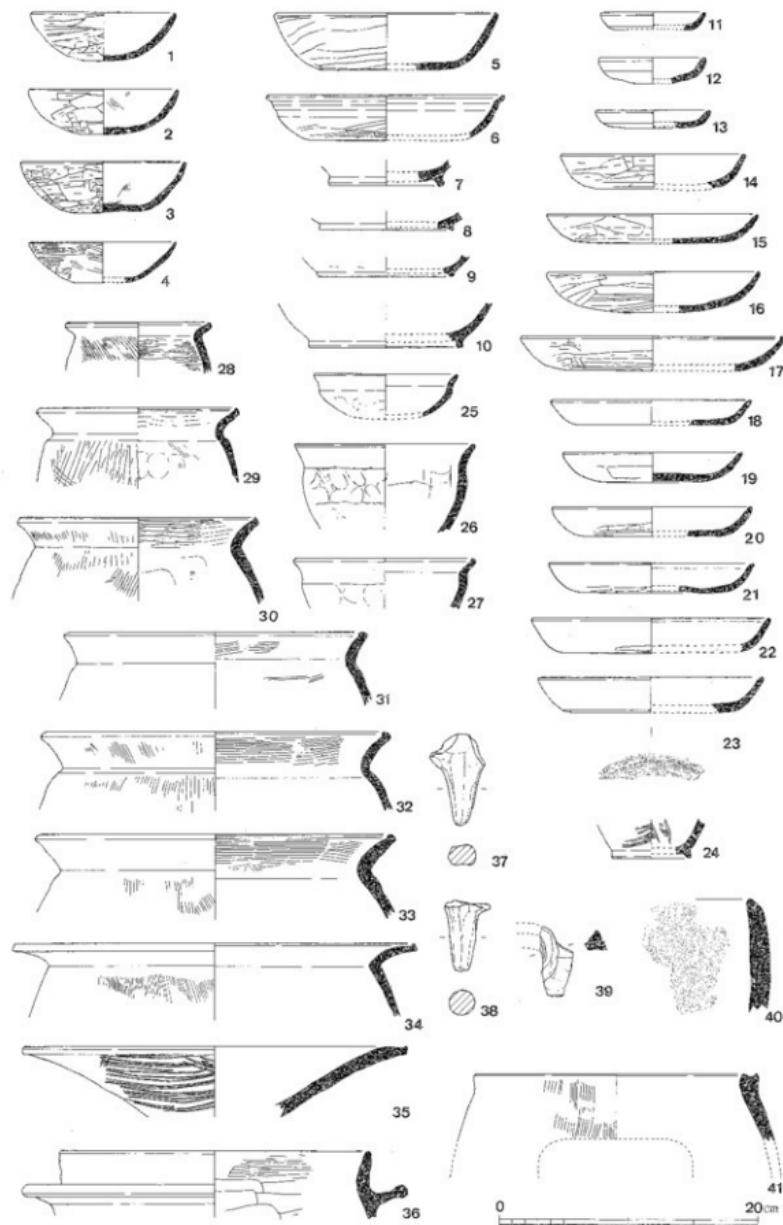
5・6は杯Aである。5は口径17.4cm、器高4.4cmを測る破片で、c手法で仕上げられている。6は外面に施された強いナデにより、外傾する口縁端部を有する。口径18.6cm、器高3.3cm。7～10は杯Bの底部片である。いずれも貼付高台であり、底径は9～12cmを測る。

11～13は皿Cで、口径8.2～9.0cmを測る。いずれも内面と口縁部はナデ調整、底部外面には成形段階の指頭圧痕が未調整のまま残っている状態である。また11には口縁部に煤が付着している。

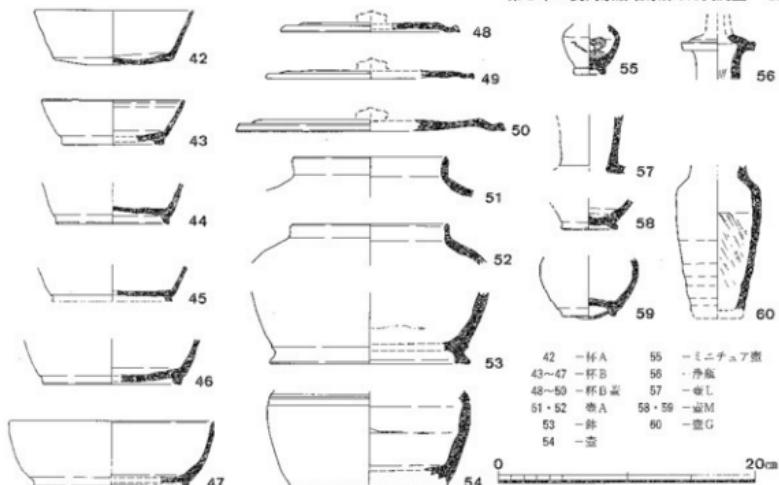
14～23は皿Aである。このうち14～17はc手法、18・23は底部外面のみをヘラケズリするb手法、19～22は底部と体部の1/3程までをヘラケズリするb'手法で調整されている。特筆すべき点として、まず15は口縁部外面にハケメあるいは平行タタキメの工具によると思われる縦方向の平行線が認められる。ヘラケズリ以前に付けられたもので、他の遺物には認められない痕跡である。また23の底部外面は回転ヘラケズリで調整されている。いわゆるロクロ土師器とはやや趣を異にする資料であるが、砂粒の動向やケズリの単位などから時計回りの回転を用いて調整を行ったことは明白である。

24は壺Eの底部片である。高台は貼付によるもので径は6.2cm。外面にはミガキ、内面には横方向のハケメを施す。25は壺C、26と27は壺Bである。調整は口縁部と内面にヨコナデが施されるのみで、作りは全体的に粗雑で、体部に粘土紐の接合痕がそのまま残っているものもある。28～34は甌の口縁部である。いずれも破片であるため全体像は判然としないが、口縁部と体部とのバランスや傾きなどから類推して、28～33は球形の体部を有する甌A、34は長胴の甌Cであると思われる。すべての体部外面に煤が付着しており、煮炊具として使用されていたことが窺える。口径13.4～31.4cm。残存高3.9～6.7cm。

35は高杯の杯部で、口径29.8cmを測る。杯部は直線的に延びるタイプのもので、外面には分割したヘラミガキが施されている。36の羽釜は口径24.3cmに復元される破片で、外面には鈎が貼り付けられている。手法的には外面はやや強いナデで仕上げられている。内面は、口縁部に横方向のハケメ、体部にヘラケズリが施される。37・38は土馬の脚である。38は脚の端部が若干欠損している。39はミニチュア竈である。付け廻の部分が残存する破片で、高さ6cm前後の個体になるものと思われる。40は製塩土器の口縁部で、内面には布目圧痕を残す破片である。細片のため口径は特定できなかった。41は竈の破片である。口縁部のみの小片であるため、廻の形態等



第12図 溝SD67502出土遺物実測図－1 (1/4)



第13図 溝SD67502出土遺物実測図－2 (1/4)

はわからない。口径22cmを測り、外面にはハケメを施す。

須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、壺A、壺G、壺L、壺M、鉢、ミニチュア壺、淨瓶がある(第13図)。42は杯Aで、口径12.4cm、器高4.2cmを測る。内外面共にヨコナデで調整され、底部は回転によるヘラキリの後、不定方向のナデが施されている。

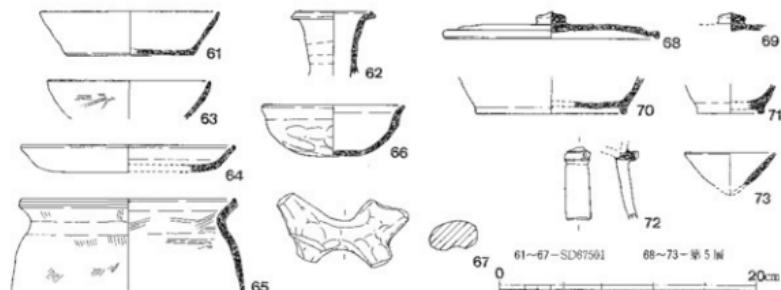
43~47は杯Bの破片で、43と47は口縁端部まで残存している。高台はすべて貼付高台である。杯部は外方へ直線的にのびるもののが主流だが、47の杯部は底部から丸みを帯びながら上方へ立ち上がるるものである。胎土は一様に精良で、長石の微粒を多く含む。口径は43が11.2cm、47が16cm。底径は8.0~12.1cm。杯B蓋(48~50)は、いずれも残存率1/4程度の破片で、口径は14.0~21.0cmを測る。このうち49および50の内面全体に墨痕が認められ、研磨されたような状況を呈することから転用硯と考えられる。

51・52の壺Aはどちらも口縁部の破片で、口径は51が12.0cm、52が12.3cmに復元される。また52の外面には自然釉が付着している。

53は鉢の底部片で、底径15.6cmを測る。高台は貼付によるもので、ヨコナデで仕上げられている。体部外面にはヘラケズリを施す。内面はヨコナデ調整であるが、底へ向かうにつれナデが粗くなり粘土接合痕が残存する部分もある。

54は壺の体部である。大きく張り出す肩部は径15.8cmを測り、3条の沈線を巡らす。底部は欠損しているためまずは平底に復元したが、脚を有する可能性も考えられる資料である。外面へラケズリ、内面はヨコナデ調整。

壺L(57)は頸部のみの破片で、口縁端部並びに体部等は残存していない。墨が内面全体に著しく付着しており、墨壺として使用されていたことが窺える。壺M(58・59)は、どちらも底部から体部の破片である。貼付高台で、内外面ともにヨコナデで仕上げられている。また、59の高



第14図 溝SD67501・第5層出土遺物実測図（1/4）

台接合部分には、接合が不十分だったためか焼成時に空気が膨張してできた扁平な空洞がある。

壺G（60）は、体部のみの破片である。法量は肩部径6.4cm、底部径4cm、残存高11.4cm。外面と肩部内面はヨコナデ調整で仕上げられている。体部内面は、まず全体をヨコナデし厚みを整えた上で、径を調整するために絞り込んでいる。体部の下2/3にはこの時できた皺がそのまま残存しているが、上1/3から頸部にかけては皺がナデ消されている。

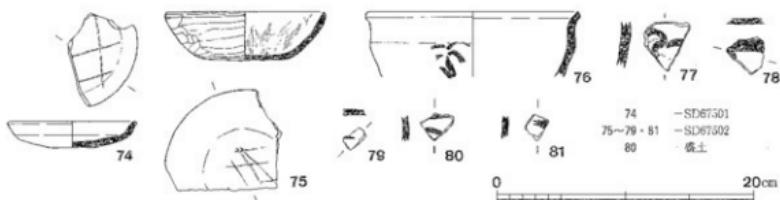
ミニチュア壺（55）は頸部が欠損しているが、比較的残存度の良い資料である。体部外面には緻密なナデが施されている。とりわけ肩部は、板状の工具を用いた3単位のナデにより丸みのあるカーブを作り出している。底部には貼付高台が認められる。高台は体部の規模からすると脚が太く、径も大きいので安定感を感じられる。焼成は良好であり、肩部に緑灰色の自然釉が密に付着している。また、墨痕が多い点もこの土器の特徴と言えよう。墨痕は外面にあり、外面には筆で記された線状のもの、内面には墨液が流動した跡が見受けられる。以上の状況から、墨壺として利用されていた可能性が推察される。淨瓶（56）は口縁部と体部以下が欠失した小片である。自然釉が厚く、緑色も濃く明瞭である。

#### 溝S D67501出土遺物（第14図 61~67）

土師器では椀A、皿A、甕、壺C、須恵器では杯A、壺L、土製品では土馬などが出土した。

61は須恵器杯Aで口径14.0cm、器高3.4cm。内外面ヨコナデ調整。底部は回転ヘラキリの後、不定方向に軽くナデている。62は須恵器壺Lの頸部で、この部位に関しては完形の資料である。口径6.1cm、残存高5.2cm。長石粒を多く含む胎土で、暗灰色を呈するほどに十分な還元焼成がなされている。

63は土師器椀の口縁部で、口径12.7cmを測る。内面と口縁部にはヨコナデ、その他外面には軽いヘラミガキが施される。64の皿Aは口径16.8cm、器高2.1cm。胎土は砂粒が少なく精良で、手手法により調整されている。甕（65）は端部に平坦面をもち、沈線を1条巡らせている。口縁部から頸部はヨコナデの後、一部ハケメが施される。体部は内外面共に手づくねで成形した後、粗いハケメで調整される。口径16.9cm。壺C（66）は口径11.2cm、器高4cmを測るほぼ完形の資料である。口縁部と内面のみをナデ、体部外面は未調整という一般的な手法でつくられ、乳橙



第15図 線刻土器・墨書き土器実測図（1/4）

色に焼き上げられている。67は土馬の胴部である。頭部や尾部など末端はすべて欠損している。

#### 第5層出土遺物（第14図 68～73）

第5層とは先述の通り、遺構検出面直上に堆積する長岡京期の遺物包含層を指す。この層からは須恵器の杯B、杯B蓋、円面硯、壺M、土師器のカマコなどが出上した。まず杯B蓋（68・69）のうち68は端部まで残存する破片で口径16.9cm、器高2.1cm。内面は著しく研磨され、墨痕も認められることから転用硯と考えられる。69のつまみは土師器と見紛う程に焼きがあまく、乳褐色を呈する。つまみ部径2.15cm。壺Mの底部（71）は底径5.2cmの小片で、残存高2.3cm。

72は円面硯の脚部の破片である。この脚部の両側面は長方形透かしに伴う切断面であるが、破片がこの1点のみのため透かしの規模、数量などは推定できない。また脚部と硯部の境に巡らせた突帯には円形浮文が貼り付けられている。カマコ（73）は口縁1/4残存の破片で内面にのみナデが施される。口径7.1cm。

#### 線刻土器・墨書き土器（第15図）

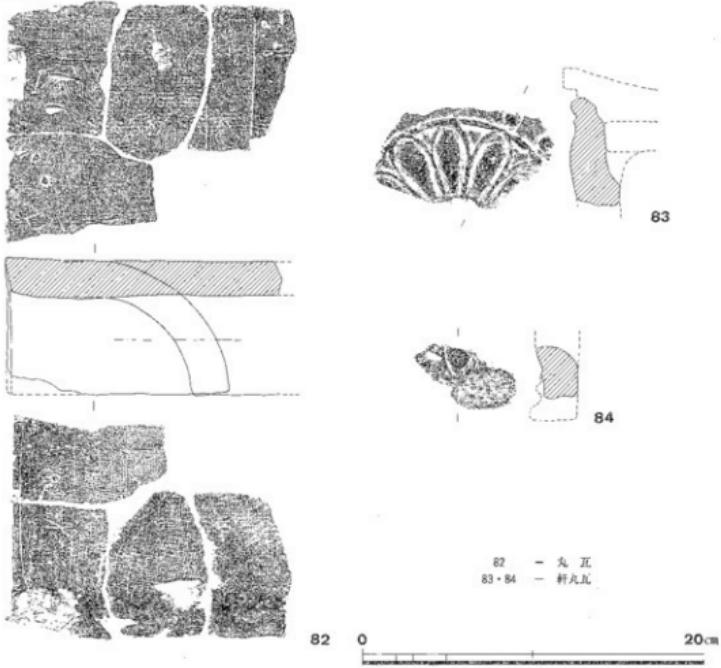
調査を通して線刻土器2点、墨書き土器6点が出土し、そのすべてを図示した。六条条間南小路の剝溝出土のものが大半で、盛土からも1点確認された。

まず74は溝S D67501出土の皿Cで、内面に線刻を施す資料である。口径10.0cm、器高2.0cmを測り、口縁部のみヨコナデするa手法で仕上げられている。また内面と口縁部には煤が付着しており、灯明皿に使用されていたと考えられる。線刻は、上器の欠損のため全容はわからないが、「井」もしくは格子目が刻まれていたと推定される。次に75は溝S D67502出土の杯Aで、こちらは底部外面に線刻が認められる。

76～81は墨書き土器である。76は、口径16.6cmを測る土師器壺Bの体部に人面とみられる墨書きがなされている。77・80・81は、壺Bの体部と思われる外面未調整の破片に墨痕が認められるものである。おそらく人面の一部であろう。78・79は皿の底部外面に墨書きされている。これらは文字とみられるが、小片のため判読はできなかった。

#### 瓦（第16図）

瓦はすべて溝S D67502より出土した。82は丸瓦で、広端縁の端部を残す破片である。桶巻き作りによるもので、内面には桶の横骨痕や布目が認められる。外面には網目タタキが施される。83および84は単弁蓮華文の軒丸瓦の瓦当片である。どちらも蓮子や外区等が残存していないのに



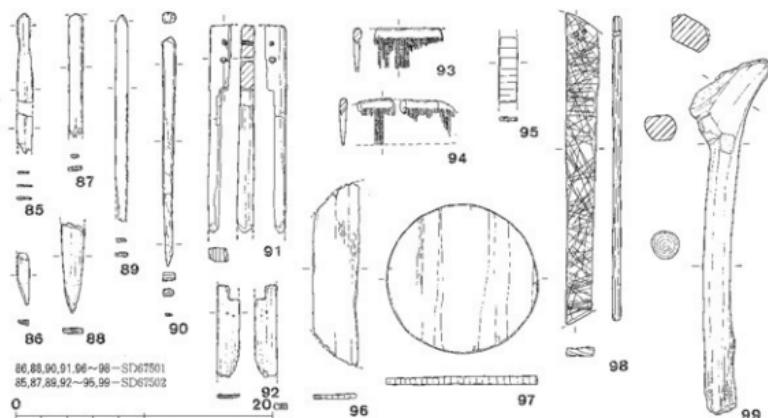
第16図 瓦実測図・拓影 (1/3)

加え非常に小片である。このため范型を特定するには至らないが、長岡宮式7133型式の範疇に収まる資料と考えられる。

#### 木製品（第17図）

溝S D67501出土の木製品には、斎串（86・88）、箸状木製品（90）、用途不明木製品（91）、曲物底板（96・97）、曲物蓋（98）がある。まず86・88の斎串は、共に上半分が欠損する。86は残存長4.1cm、厚さ0.2~0.4cm。88は残存長6.95cm、厚さ0.4cmを測る。90は頭部を面取りし、下部は細かな単位で削り込むことで尖らせている。長さ17.85cm、幅は最大1.0cm、最小0.6cm。91は欠損状況が著しいため、詳細不明である。厚さ1cmの部材に穿孔が2ヶ所に施される。曲物底板のうち96は小片のため直径等は分からぬ。厚さ0.35cm。97は直径11.7cmを測る小型品で、側面には側板を固定するための釘穴がほぼ十文字に4ヶ所認められる。98は表面に無数の刃物痕を残すもので、側板を綴じ付けるための穴が2ヶ所開けられている。またこの穴には綴じ紐に使われていた樹皮が僅かに残存している。

溝S D67502からは、斎串（85・87・89）、不明木製品（92）、横櫛（93・94）、曲物側板（95）、柄状木製品（99）が出土した。85の斎串は上半分のみの資料で、側面もやや剥落している。87と89は下端を欠失する。どちらも上端を圭頭にしており、長さは87が9.65cm、89が16.05cmを測る。92は2ヶ所に穴を穿つ木材だが、状態が芳しくないため用途は不明。厚さ0.3cm。93の横櫛は高



第17図 木製品実測図 (1/4)

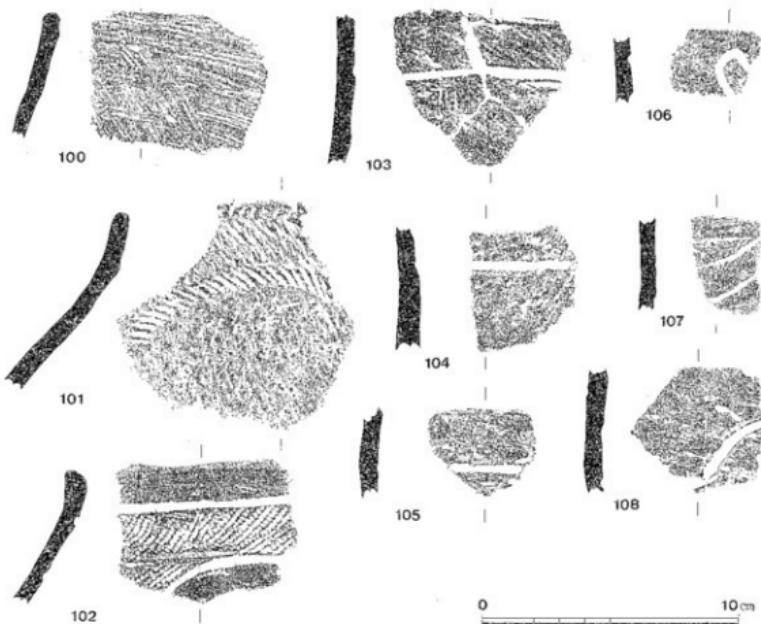
さ3.25cm、歯は9~10本/cmである。94は歯の残存状態は良くないが、原形を留める部分が若干あり高さ3.6cmであることがわかる。歯は15本/cmで非常に細かな類に属する。曲物側板(95)は現状で長さ5.05cmを測る。屈曲を促すために刻まれた溝が約5mmの間隔で7条認められる。99は柄と考えて相異ないと思われるが、装着部がやや欠落しているためその種別までは断定できない。ただ形態的には手斧の柄に近いかと推察される。この柄は木の幹と枝との股を利用してし、枝はそのまま柄部に、幹は加工して装着部を作り出している。

#### 〔縄文時代の遺物〕

##### 縄文土器（第18図）

縄文土器は、自然流路S R 67505の褐色砂礫層（第21層）より出土したものである。本調査では10數片ばかり確認されたが、細片も含まれるため固化できたのは計9点である。うち3点は口縁端部の破片で、これらについては土器の傾きを捉えることができた。残り6点はいずれも体部片で、こちらは断面と拓影を示すに留めた。

まず100は深鉢の口縁部で、屈曲点を置かずやや外傾するものと考えられる。外面には横方向のち斜め左上がりの巻貝による貝殻条痕文が施される。型式までは限定できないが、時期については文様構成から前期前半に位置づけられるものと思われる。101も同じく深鉢で、頸部から緩やかに外傾しながら移行し、屈曲点をおいて直線的に立ち上がる口縁部を有する。口縁端部には刻み目が施され、口縁と頸部の境にあたる屈曲点には貼付突帯が1条巡る。加えて外面には地文として燃糸文が、貼付突帯には爪形文と思われる刻みが認められることから、前期末の範疇に収まるものと考えられる。102も深鉢の口縁部片で、最も摩滅が少なく文様の残りが良い資料である。丸みを帯び且つやや内傾する口縁端部を特徴とし、外面には2条の四線文で区画されたエリアに縄文が施される。いわゆる充填手法によるもので、中津式（後期初頭）に比定されると考えられる。103は全体的に摩滅しているため詳細は不明だが、2条の四線と燃糸文とみられる左上

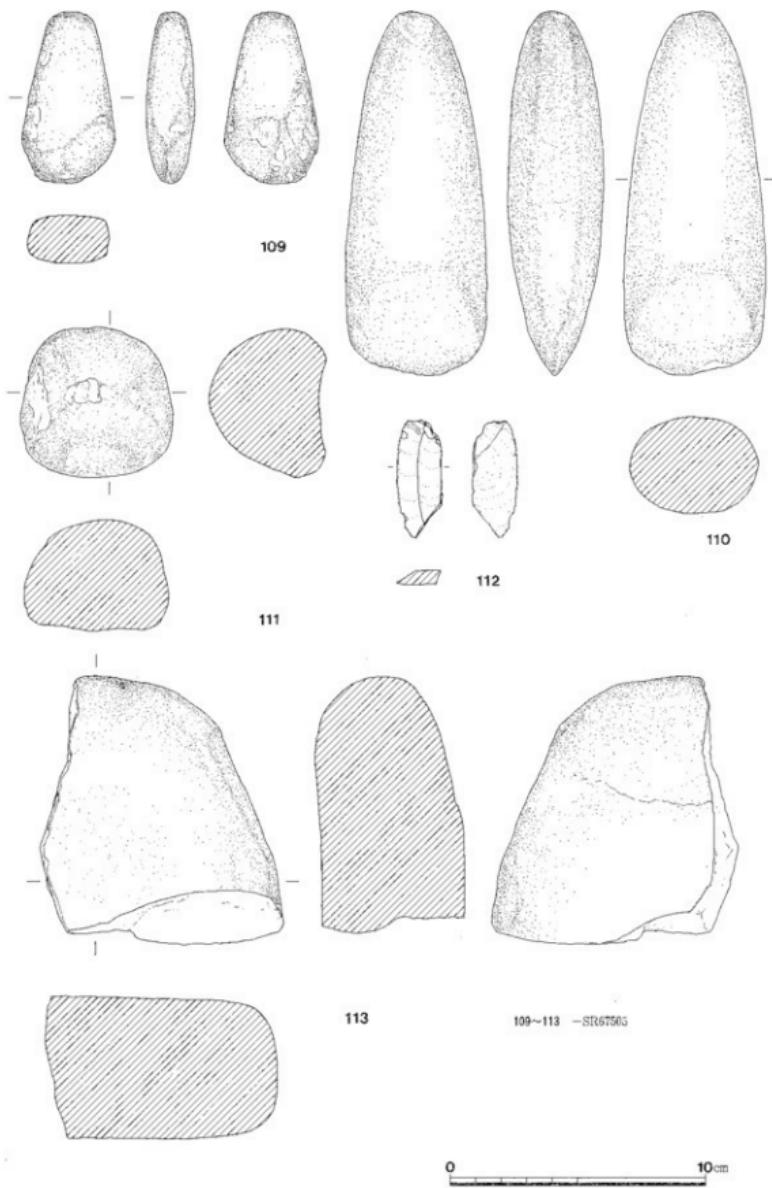


第18図 繩文土器実測図・拓影(1/2)

がりの縄文が認められる。104についても摩滅のため不明な点が多いが、凹線と共に縄文も施されていると思われる。105は破片の範囲内では横方向の凹線のみを施す。106は凹線によって円弧状の文様を施す破片である。107は地文に撫糸文をつけた後、現状で3条の凹線を描いている。108は円弧を描く凹線が1条認められるもので、縄文は破片内では確認できない。103~108は破片が小さく、得られる情報量は限られていたが、文様構成などから類推して中津式（後期初頭）前後に位置づけられるかと思われる。

#### 石製品（第19図）

磨製石斧（109・110）、磨石（111）、石皿（113）、サヌカイト剝片（112）の計5点が出土している。これらはすべて、先に説明した縄文土器と同じ自然流路S R67505の第21層で確認された。まず、109の磨製石斧は長さ6.7cm、刃部幅3.6cmを測る小型の製品で、両側面が平滑に仕上げられている。石材は砂岩であり、淡緑灰色を呈する。素材が非常に脆く規模も小型であるため、実用品ではないかもしれない。同じく磨製石斧（110）は凝灰岩系の石材による始刃石斧で、全長14.2cm、刃部幅5.6cm。磨石（111）には、球形ではあるがやや凹んだ面を有する花崗岩が用いられている。この凹んだ部分のみ摩耗していないことから、持ち手をこの部位に求めることができる。また、一部に敲打痕があり、敲石としても利用されていたことが推察される。石皿（113）は砂岩製。研磨を受けている面は1面のみで、この面には研磨に伴うくぼみも認められる。サヌ



第19図 石製品実測図 (1/2)

カイト剥片（112）は、背面調整が全く施されていないため製品とは考え難い。

## 5 まとめ

今回の調査では、縄文～古墳時代、長岡京期の遺構が検出された。ここでは本調査の検出遺構を中心に、周辺調査での成果を含めた検討を行いまとめとする。また、調査区南西隅の拡張区に関する調査所見も合わせて報告する。

### (1) 縄文～古墳時代の開田遺跡について

本調査では、自然流路 S R 67505が検出された。周辺では右京第410次調査において、古墳時代を上限とし縄文時代の遺物をも包含する流路堆積 S D41009が見つかっている。<sup>(4)</sup> S D41009は、犬川に合流する旧和泉殿川に伴う堆積層と考えられている。当地で確認された S R 67505は、この流路堆積と時期がほぼ一致し、土層堆積状況も類似することから、一連の堆積層と考えるのが妥当であろう。これを踏まえ、当地の縄文土器を考える上で重要なのが、旧和泉殿川の上流域に所在する十三遺跡の存在である。十三遺跡では、縄文時代中期～晩期の土器やサヌカイト剥片、<sup>(5)</sup> 石匙などが出土している。これら遺物は、旧和泉殿川の流れ込みによってこの地に二次堆積したものであり、さらに上流にあたる南西方方向の段丘上に新たな縄文遺跡の存在が推測されている。<sup>(6)</sup> 今回の調査成果は、旧和泉殿川を媒体とした当地周辺と十三遺跡とのつながりを、更に裏付ける資料として評価できるものと考える。

### (2) 長岡京跡について

本調査地は、長岡京跡右京六条二坊十二町の北東隅に位置すると共に、十一町の一部にもあたっている。調査では、六条条間南小路および柵、土坑が検出された。六条条間南小路はこれまでに、計8調査で確認されており、今回が9例目となる。付表2には、六条条間南小路南北両側溝の国土座標データを、本調査の成果も含め掲載した。また第20図は、調査地周辺で検出された長岡京期の遺構をまとめたものである。

北側溝に関しては、当地の隣の敷地で行われた右京第475・565次調査で確認されており、溝 S D67501も両者を結ぶライン上で検出された。溝の構造的には右京第565次調査で見られた杭や側板は今回確認されなかった。新たな事例としては、南肩にテラス状に落ち込む部分が確認され、これが取り付く部分の溝幅は周りより広くなっている。これについては、側溝のベース層の質が大きく影響していると考えられる。ベースは旧河道の堆積層で水はけが悪く、無数の足跡が路面に残されていた。南肩張出部の底面にも足跡と思われる凹凸が全面で認められ、深さも浅い。よって意図的に掘られたものと考えるよりは、ぬかるんだ拍子に肩が崩されこの様になったとするのが妥当かと思われる。

南側溝 S D67502は溝幅、深さともに北側溝より一回り大きく、東に向かって狭まる傾向にあることが明らかになった。溝の断面形態にも東西で変化が認められ、東の方が角度も急で、底の平坦面も不明瞭になる。この要因としては、右京第565次調査で確認された西二坊坊間小路と六条条間南小路の交差点において南北道路が優先される状況が挙げられる。この結果からSD67502

の流水方向は西から東の方向に求めることができ、溝幅の狭小や断面形の変化は、東方向へのスムーズな流水を促すための意図的な配慮であると考えられる。埋土からは一般雑器に加え、淨瓶、ミニチュア壺、ミニチュア竈などの特殊遺物も出土しており、当遺構もさることながら六条二坊十二町の宅地の利用状況を復原する上でも注目される資料と言えよう。

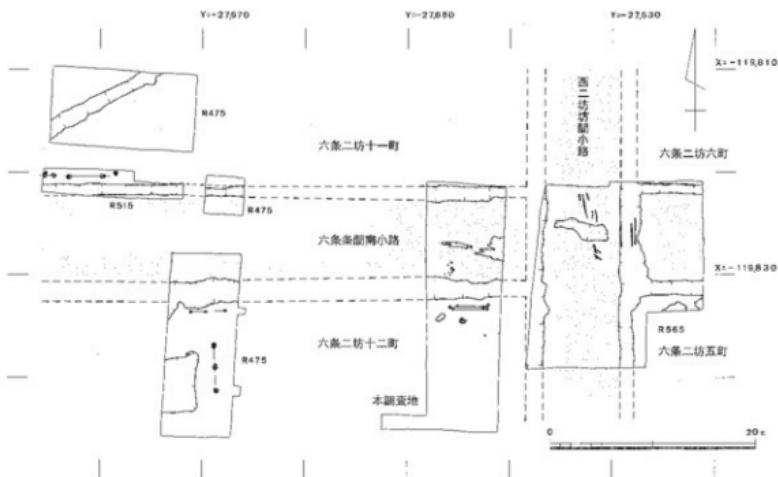
六条二坊十二町では、南小路と宅地を区画する権、土坑が検出された。十二町内では当地も含め計5回の調査が行われているが、調査は縁辺部に集中しており、宅地中央部の様相は未だ判然としない。「西市」の所在も含め、十二町の利用状況ならびに性格を検討するためには、中央部での更なる調査が必要不可欠である。

### (3) 南西拡張区の調査結果について

西接する敷地内に「古墳」と伝承され、地元の方々に祭られている円形のマウンドが存在し、その真相を追究する目的で、地境に設けられたフェンスの基礎までの間を1.5m幅で線掘りし調査を試みた。その結果、遺構としては近現代のものと思われる竹管を用いた南北方向の暗渠溝が1条検出された。

付表2 六条条間南小路調査成果一覧表（第VI座標系）

次数	遺構番号	X座標	側溝	次数	遺構番号	X座標	側溝
L288	SD210	-119,819.40	北側溝	L288	SD211	-119,828.90	南側溝
L414	SD17	-119,819	北側溝	L414	SD16	-119,828	南側溝
L216	SD03	-119,818.40	北側溝	L216	SD04	-119,827.70	南側溝
R565	SD03	-119,821.63	北側溝	R638	SD10	-119,830.80	南側溝
本調査地	SD67501	-119,821.80	北側溝	R565	SD04	-119,831.26	南側溝
R475	SD07	-119,821.87	北側溝	本調査地	SD67502	-119,831.40	南側溝
R515	SD01	-119,821.80	北側溝	R475	SD03	-119,831.32	南側溝
R344	SD01	-119,824.60	北側溝	R344	SD02	-119,833.75	南側溝

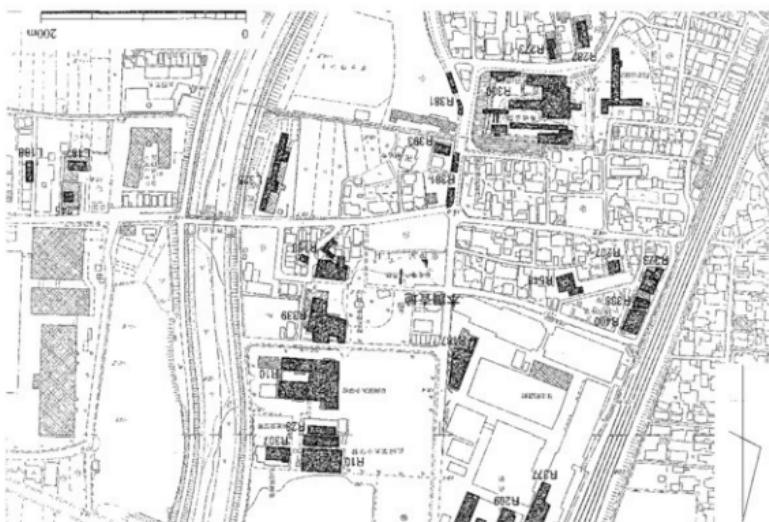


第20図 調査地周辺における長岡京期の検出遺構 (1/500)

全体的な状況としては、1) 西進するに従いベースの砂礫層の面が高くなること。2) 調査区中央でベースをおそらく削り込み、西側を高まり状にして以東と区画していること。などが判明した。しかし自然流路脇の川原という地形的に不安定な場所に立地する点や、ベース上面の堆積層から古墳に関連する遺物が全く出土していない状況などを考慮するならば、現時点では古墳とは判定し難く、むしろ可能性は低いものと考える。マウンドそのものの調査を待って再検討したい。

- 注1) 木村泰彦「右京第475次調査概要」『長岡京市報告書』第33冊 1995年  
中島告夫「右京第515次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊 1997年  
2) 木村泰彦「右京第565次調査概報」『長岡京市センター年報』平成9年度 1999年  
3) 木村泰彦・近澤豊明「右京第106次調査概要」『長岡京市センター報告書』第1集 1984年  
木村泰彦「右京第173次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和59年度 1985年  
4) 小田樹 淳「長岡京跡右京第410次調査概要」『長岡京市報告書』第31冊 1993年  
5) 木村泰彦「右京第203次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年  
小田樹 淳「右京第344次調査概報」『長岡京市センター年報』平成元年度 1991年  
6) 小田樹 淳「繩文時代」『長岡京市史』資料編一 1991年  
7) 注1・2に同じ

第21图 先端调查地图(1/5000)

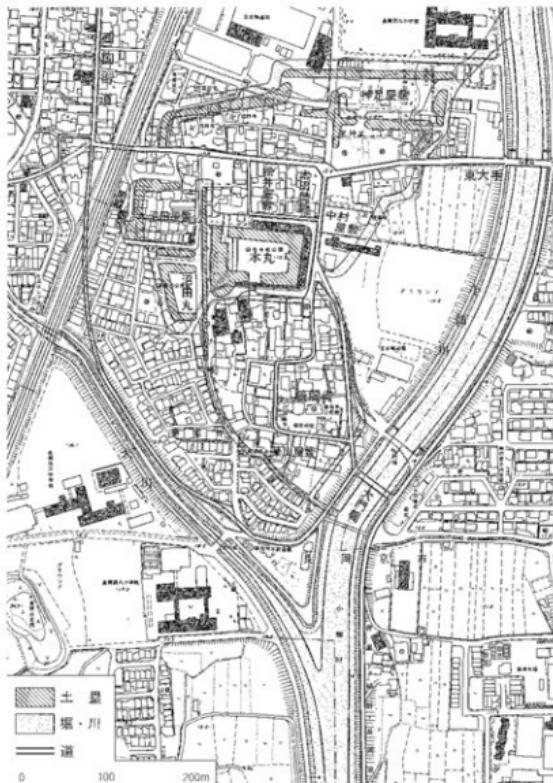


1. 本報告は、2000年9月4日から2000年10月31日まで、長岡市東神民二丁目7-1号の実験用施設で実験を行った。該用施設は東北第一工場の一部である。
2. 本報告は、測定用測量器具を用いて、実験用の測定装置、実験操作による測定結果についての調査結果を記載するものである。
3. 調査結果、平成12年度国際測量事務報告書にて、長岡市教育委員会が主催した、財团法人長岡市測量文化財団が実施した調査結果を記載する。
4. 調査の実施に当たり、土地所有者各位様、地元住民、近隣の土地所有者、地元自治会の方々に感謝を表す。
5. 本書の執筆と出版準備に貢献された方々に感謝する。

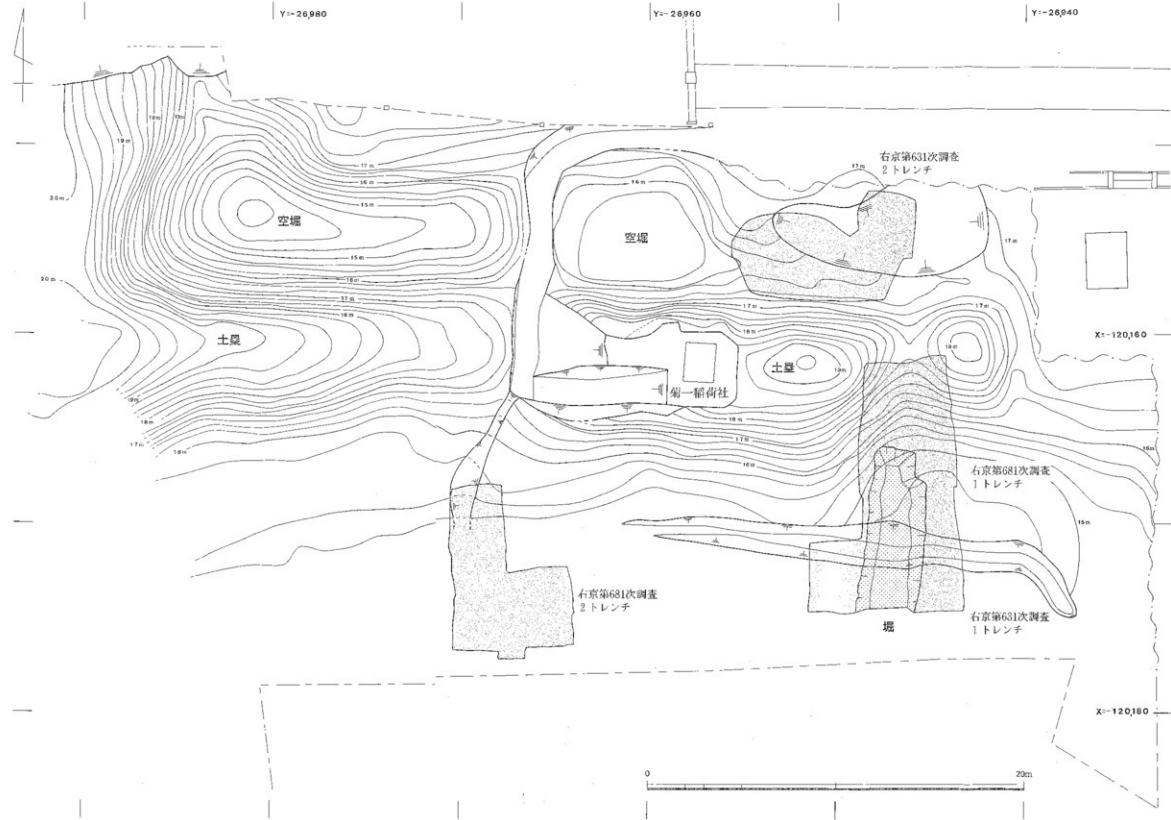
## 2 調査経過

調査地は、JR長岡京駅の南東約400mの住宅地と公園が隣り合う竹薮の中に位置する。延喜式内社に数えられる神足神社に隣接し、南西約200mには勝龍寺城の主郭部分が都市公園として整備されている。

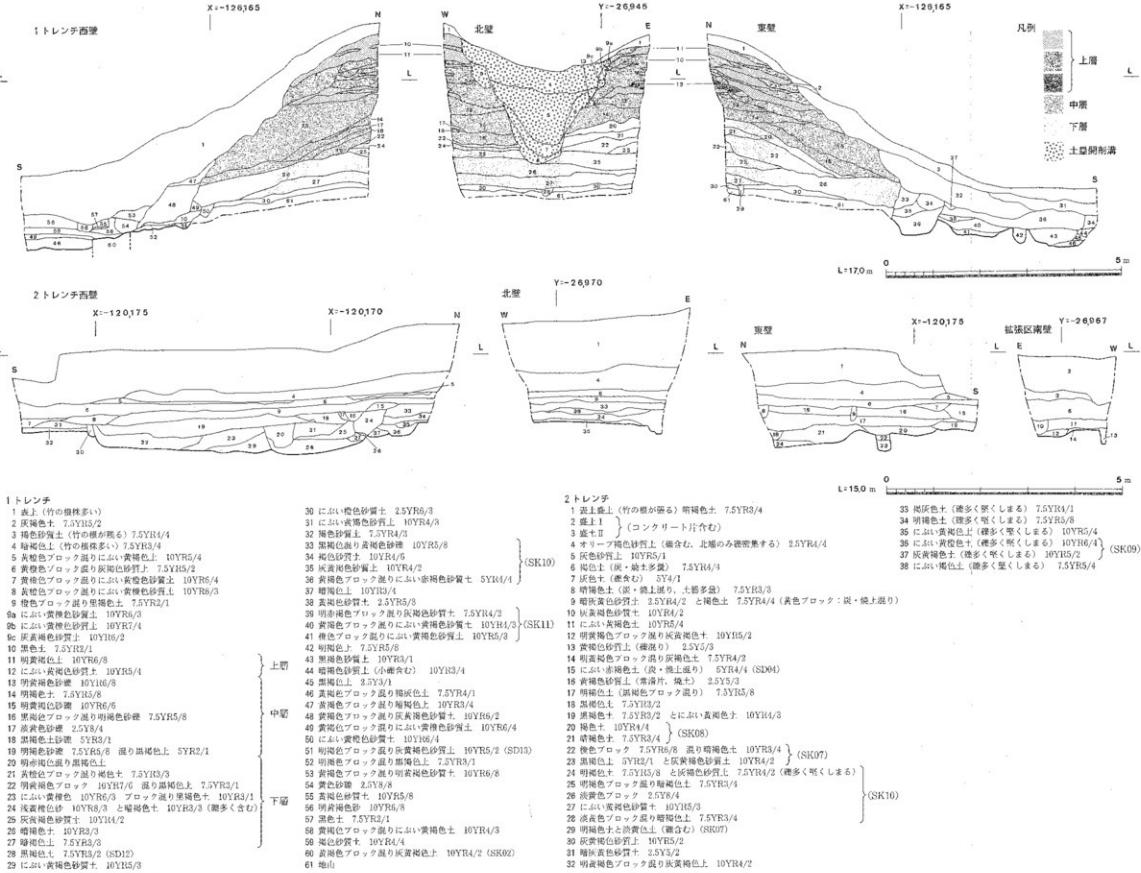
調査対象地の竹薮内に残る東西方向の土塁と空堀は、元龟2（1571）年に細川藤孝が大改修した際の遺構として知られており、堀と土塁の構造をもつ城であったことがわかる（第23図）。勝龍寺城については、『日本城郭大系』、『地籍図』、『勝龍寺城跡』などに、大正11（1922）年の地図や字名から、細張りと城下の構造について検討されており、主郭と外郭の堀、土塁が残る中世城郭として報告された。その後、昭和54・55（1979・1980）年に京都考古学研究会が土塁、空堀と周辺の地形や地物を含めた地形測量図を作成し、細部の形態や現況について資料が提供された。しかし、昭和59（1984）年の宅地造成に伴い神足神社参道東側の土塁と空堀が消滅する。事前に行われた右京第163次調査では、土塁の下から6世紀後半の木棺を直葬した方墳が確認された。



第22図 勝龍寺城拡張復原図（1/6000）  
(長岡京市史本文編1より)



第23図 土塁・空堀の測量図と調査地点 (1/200)



第24図 1・2トレンチ 各壁面土層図 (L/80)

調査は、調査対象地に密生する孟宗竹と真竹の伐採、搬出と清掃作業から開始した。その後、地形測量と各トレンチの調査を行い、終了後に埋め戻しを行った。

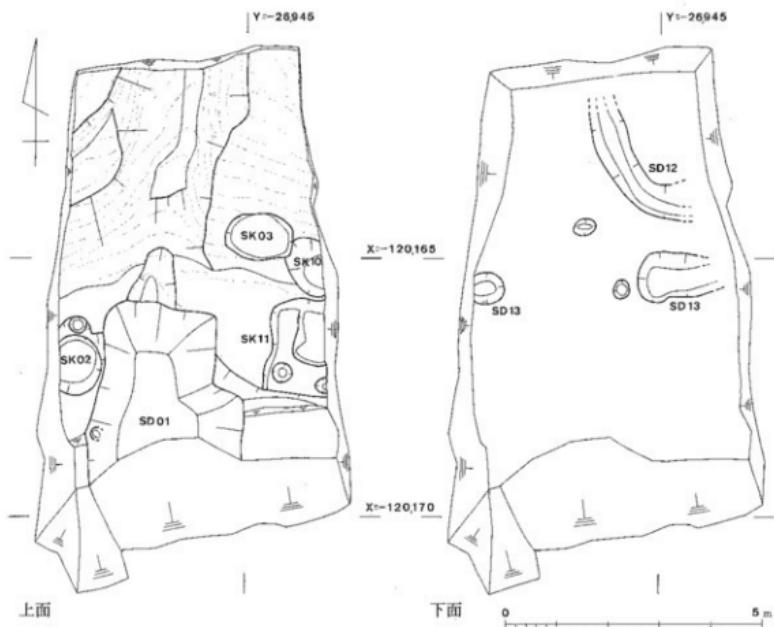
### 3 検出遺構

調査は、2カ所のトレンチを設定した。1トレンチは、右京第631次調査<sup>(1)</sup>1トレンチで検出した堀 S D01と土壘の新旧関係を明らかにすることを目的に設定した。調査面積は49m<sup>2</sup>である。2トレンチは、右京第608次調査<sup>(2)</sup>石組溝 S D02の延長部分と土橋南側の遺構状況について確認することを目的に設定した。調査面積は39m<sup>2</sup>である。

〔1トレンチの遺構〕 前回の調査では、土壘南側から幅約3mの堀を検出した。堀は南北方向に延びており、東西方向の土壘と交差する部分では土壘天頂部が凹むことから、調査時は堀を埋め戻した後に土壘が築かれ、その後土壘が沈下したものと推測した。今回の調査では、その当否を確かめるために土壘の断ち割りを行った。調査範囲は、前回のトレンチ北端と土壘天頂部を結ぶ線までとした。調査は土壘の現況をできるだけ損なわないようにし、



第25図 上壠の調査（南から）



第26図 1トレンチ検出遺構図 (1/100)

調査後は元に復旧した。

検出した遺構には、上面から土壘、堀 S D01、土坑 S K02、土坑 S K03、土坑 S K10、溝 S D11が、下面からは土壘構築前の溝 S D12がある。

**土壘** いわゆる饅頭を半分に切ったような形をしている。東西の土壘天頂部から裾部まで表土層を除去すると、土壘斜面には土壘を構築する黒色土と明黄褐色土が交互に堆積する層（以下、土壘上層）、砂礫層（以下、土壘中層）、暗褐色系の土層（以下、土壘下層）の3種類の土層が上から順に山形に堆積する状況が認められた。土壘が凹む部分は土壘構築土が途切れており、小礫を含む黄褐色系砂質土が被さった状態で検出された。土壘をV字形に掘り込む溝は、幅約3m、深さ約2m、底は約0.8mの小さな平たん面となっている（以下、土壘開削溝）。

土壘上層は、土色の異なる土を交互に積み重ねており、断面山形の層厚は最大1.3mである。このような堆積状況は、古墳の墳丘盛土と類似する。土壘中層は、長径10cm前後の石礫を多量に含んでおり、空堀を掘削した際の段丘礫層を積み上げたと考えられる。層厚は最大1m。土壘下層は、土壘基底を構成する堅く締まった土。石礫はほとんど含んでいない。土壘開削溝は、東西の土壘断面が連続する土層であることから、土壘構築後に開削されたことは間違いない。土壘内は南から北へ登るように山形の小さな通路となっており、北壁部分の底と堀 S D01の検出面の高低差は約0.7mである。

土壘の掘り下げは全て人力による手作業で行い、土壘本体はL字形に断ち割る予定であったが、最終的にトレンチ内の土壘は完全に除去することとした。なお、各壁面はステレオカメラで撮影したデジタル画像で保存している。

**堀 S D01** 前回の調査地から北へ延びる堀を確認する。堀は東辺が内に折れて幅が3.2mから2mと狭くなっている、土壘の手前で終息することが判明する。底は平たんで、深さは約2mである。なお、北壁上端の溝状遺構については、開削溝が掘られた以後に土砂や流水作用でできたものと考えられる。埋土は、概ね黒褐色土（上層）、黄褐色系土（下層）、地山直上の粘質土（最下層）に分けられる。

**土坑 S K02** 一部西壁にかかる直径約1mの円形掘形。深さは0.7m。

**土坑 S K03** 土壘裾に掘られた長辺1.4mの長円形掘形。深さは約0.3m。埋土から近世遺構と考えられる。

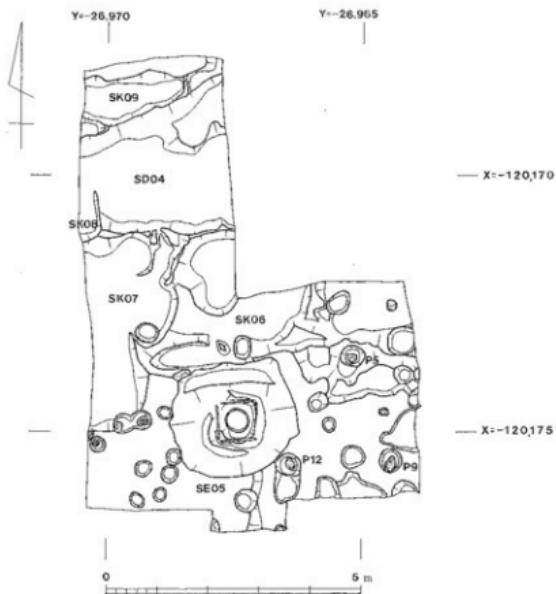
**土坑 S K10** 一部東壁にかかる一辺1m、深さ約0.6mの不整形な掘形。中世遺物が出土した。

**土坑 S K11** 一部東壁にかかる一辺約1.5mの方形掘形。深さは0.3m。

**溝 S D12** 土壘下から検出されたL字形に曲がる溝。北壁で幅約0.3m、深さ0.2m。弥生時代の方形周溝墓の溝となる可能性がある。中世遺物に混入して弥生土器が出土している。

**溝 S D13** 土壘と平行する東西方向の溝。幅0.6~0.8m、深さ0.4~0.6m。土壘を構築する際の目安となった可能性がある。溝の輪郭は土壘で部分的に検出されたが、土壘本体に入り込むことから当初は全体を確認できなかった。

〔2トレンチの遺構〕 調査地点は、土壘と空堀を横断する土橋のほぼ南延長線上にあたる。



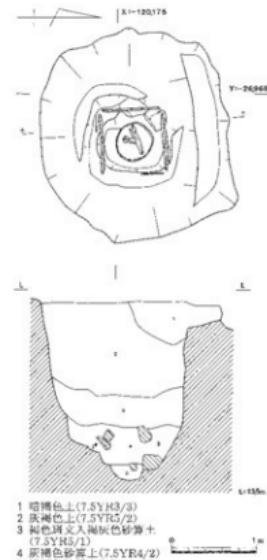
第27図 2トレンチ検出遺構図 (1/100)

隣接する右京第608次調査では、上面から藤孝期の石組溝と転用石材を用いた石組井戸を検出し、下面からは多数の柱穴を検出した。本地点においても上下2面の遺構が検出される予測された。

調査地は、竹の根が張る表土層以下、第2～7層に多量の石礫と炭、焼土片、土器を含む堆積層が全面に広がっている(図版13-1)。北から南に緩やかに傾斜しており、層厚は約0.6mである。南側の右京第608次調査では標高14mあたりで石組溝SD02を検出したが、本地点ではこれと関連する遺構は確認できなかった。これらの堆積層に含まれる雑多な集積物は、勝龍寺城の改修時に整理投棄されたものと考えられる。

下面是、調査地南側に柱穴が多く、北側は不定形な溝や土坑となっている。主な遺構には井戸SE05、溝SD04、土坑SK06、SK07、SK08、SK09と柱穴などがある。

**井戸SE05** 直径2.3m前後、深さ2.1mの円形掘形。底部に方形井戸枠の部材片が残り、内側は一段掘り下げた中に直径約0.4mの曲物を据えている。井戸枠の部材は残存長0.7m。



第28図 井戸SE05実測図 (1/60)

第2層と第3層は他の遺構埋土と比べて極端に堅く締まった石礫混じりの土層となっている。

溝S D04 規模は、西壁で幅2.6m、東壁で幅3m。深さは約0.7m。土坑SK08に切られる。

土坑SK06 東壁から西へ延びて土坑SK07の手前で終息する。底はかなり凹凸がみられる。

井戸SE05を切る。

土坑SK07 南北の長さ3.7m、深さ約0.5m。

土坑SK08 南北の長さ1.7m、深さ約0.5m。溝SD04を切る。

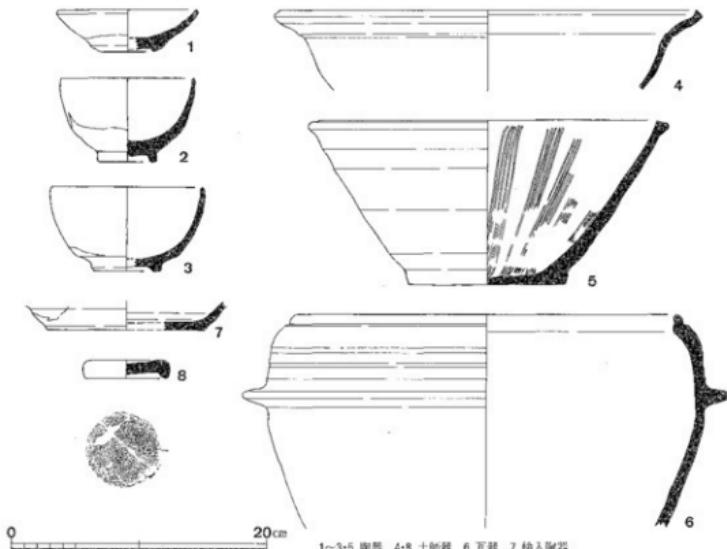
土坑SK09 南北の長さ0.9m。深さ約0.2m。溝SD04に切られる。

柱穴 挖形内に石を据えた柱穴はP5、P9、P12があり、土坑SK06の北東隅にも同様の石がある。現状では、柱穴は井戸SE05の南側に多く北側にはみられない。しかし、溝や土坑は柱穴底より深くなっている、後に削平された可能性もある。南隣の調査地では総数160個の柱穴が検出されている。

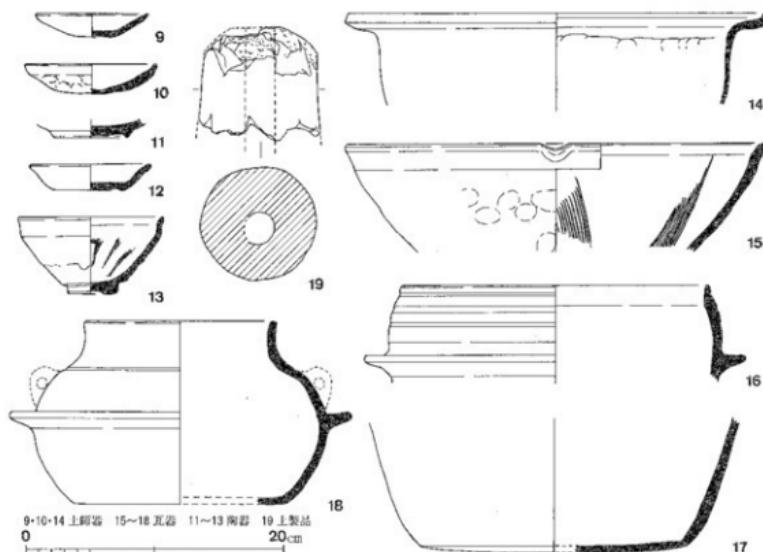
#### 4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナに16箱である。弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、石器、土製品、木製品、石製品、銅製品など多彩な遺物が出土した。遺物の大半は、2トレンチ包含層から出土したものである。

塙SD01上面出土遺物（第29図） 塙SD01埋没後に堆積した包含層から出土したもので、西



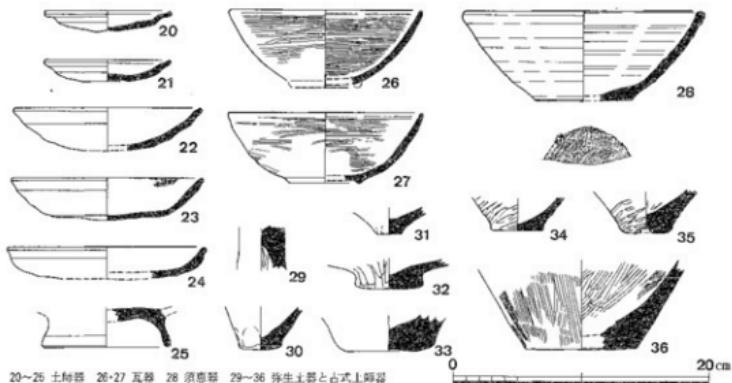
第29図 塙SD01上面出土遺物実測図（1/4）



第30図 堀SD01出土遺物実測図(1/4)

壁では第4層、第5層に相当する。唐津焼の皿(1)、碗(2・3)、土師器鍋(4)、信楽焼擂鉢(5)、瓦器羽釜(6)、輸入陶器底部片(7)、焼塩壺の蓋(8)がある。1は、口径11.1cm、器高3.8cm。高台周辺を除いた内外面に施釉する。見込みに砂目積み跡がある。2は、口径10.6cm、器高6.5cm。釉薬は高台周辺を除いた内外で掛け分けしており、外面は緑灰色を呈する。3は、口径12cm、器高6.6cm。高台周辺を除いた内外面に施釉する。暈付に糸切り痕が残り、高台内を削り出す。色調は淡黄色。肥前陶器については、碗・皿の編年からⅡ期に収まるものと考えられる。4は、口径33.4cm。外面にススが付着する。内面は体部上半にハケメ調整がより明瞭に残る。同形態の鍋が前回調査した堀内から出土している。5は、口径28.2cm、器高12.7cm。擂り目は1単位5本で、見込みには直線を斜めに交差させた擂り目を施す。全体に満遍なく使い込まれており特に体部中位は擂り目が摩滅している。底部に凸状の出下駄印が残る。6は、口径30.6cm。鍋の下面から体部にススが付着する。7は、底部を除いた内外面に暗オリーブ色系の釉を施す。口縁部は残存部からわずかに外反気味にひらいており、盤か皿になると思われる。8は、内面に布目痕跡をもつ。いびつな円形で内径は5.5cm。8を除くほかの遺物は17世紀前葉を中心とする時期に比定される。

堀SD01出土遺物(第30・40図) 土師器の皿(9・10)と鍋(14)、瀬戸・美濃焼の灰釉皿(11)、鉄釉皿(12)、天目碗(13)、瓦器の擂鉢(15)、羽釜(16・17)、釜(18)、フイゴの羽口(19)がある。9は、口径8.8cm、器高1.9cm。口縁端部に油煙痕跡がある。胎土、形態的特徴から京都の白色系皿と考えられる。10は、口径10.3cm、器高2.3cm。底部外面には粘土の細かな縮

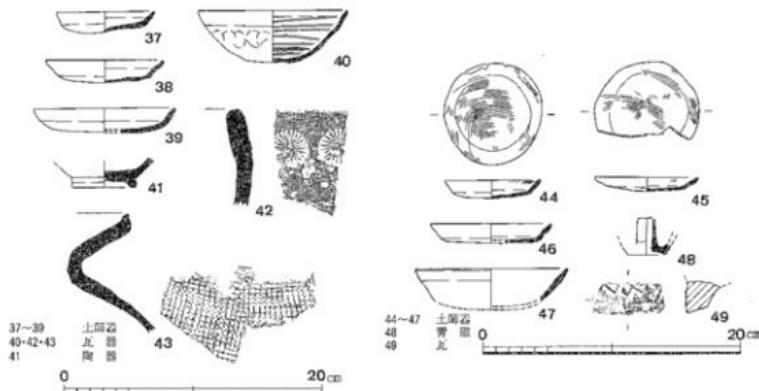


第31図 土壘構築土出土遺物実測図（1/4）

み、しわが残り、やや凹凸がある。内面のナデ調整は粗略である。乙訓在地産。14は、口径33cm。外面にススが付着する。内面は丁寧にナデ調整されており平滑。器壁は均質で薄い。11は、外面上に灰軸を施す。底部外面に輪トチ痕をはいだ跡がつく。12は、口径9.5cm、器高2.1cm。いわゆる削り込み高台で、底部外面に輪トチ痕が残り、内面にも3カ所目跡が残る。全面に鉄軸を施す。13は、口径11.4cm、器高6cm。高台周辺を除いて鉄軸を施す。内面全体に緑灰色の釉が筋状に流れた跡が残る。14は、体部が直線的に延びるやや深めのタイプ。15は、口径32.8cm。擂り目は1単位11本。片口をもつ。16は、口径24.2cm。鍔の下面にススが付着する。17は、羽釜の底部と考えられる。外面にススと焦げが付着するが、底部外面の周縁には鉄輪にのせた跡とみられるススが付かない部分が幅1cm余り残る。底部は内外面とも凹凸がなく平らである。18は、口径15cm、器高14.2cm。鍔より下にススなどが付着しており、鍔から口縁部は丁寧なヘラミガキを施す。19は、金属精錬で用いられた炉内に送風する土製管。先端に金属の溶融片が付着することから炉壁に取り付けられたものと考えられる。残存する外径は約9cm、内径は約2.5cmである。これららの遺物は概ね16世紀後葉に比定される。

硯（215）は最下層から出土した。海のところで切断しており、裏面には線刻がある。頁岩・粘板岩製。

**土壘構築土出土遺物（第31図）**　土壘造営に伴い二次堆積した遺物で、上層、中層、下層に分けられる。土師器皿（20～25）、瓦器（26・27）、須恵器鉢（28）、弥生時代の高杯（29）、甕（30）、壺（31・32）、甕（33～36）がある。20は、口径10cm、器高1.7cm。内面は油煙とみられる黒色物が付着し全体に変色する。21は、口径10cm、器高1.7cm。22は、口径14.8cm、器高3.3cm。23は、口径15.1cm、器高3.3cm。口縁端部に油煙痕跡をもつ灯明皿。24は、口径15.6cm、器高2.5cm。25は、皿に付く脚台片。26は、口径15.2cm。27は、口径15.4cm、器高5.5cm。いずれも内面は透き間のない緻密なヘラミガキ、外面は体部上半を分割したヘラミガキ、見込みは一方のヘラミガキを施す。28は、口径19cm、器高7cm。底部を糸切りする。内面の体部側面は使い込まれており摩



第32図 溝SD04出土遺物実測図（1/4）

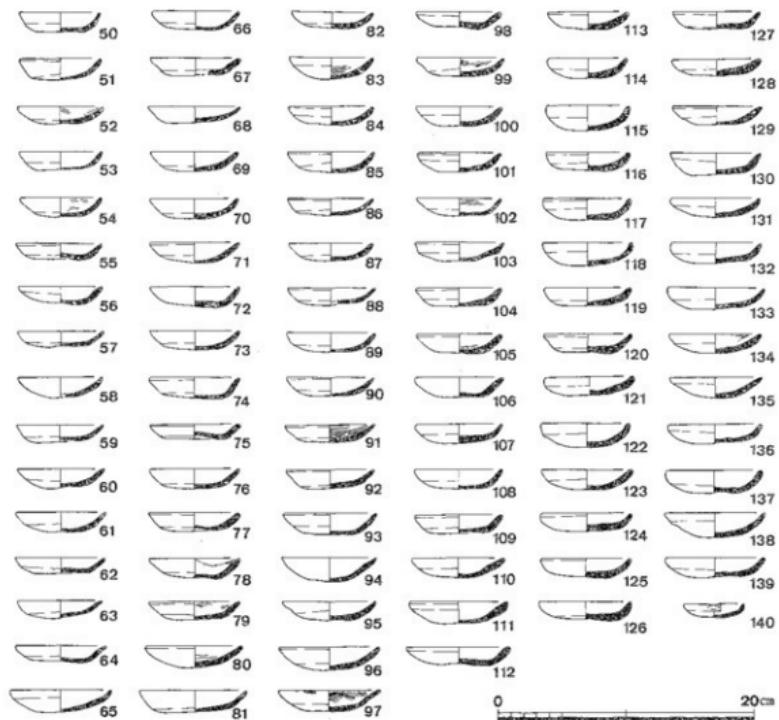
第33図 井戸SE05出土遺物実測図（1/4）

滅する。29は、高杯の柱状部分。内外面とも摩滅する。30は、底部が火熱により赤変する。底径3.4cm。31は、内外面ナデ調整。底径2.1cm。32は、外面をヘラミガキ調整。内面は摩滅する。黒斑がみられる。33は、摩滅しており調整不明。34・35は、外面にタタキ痕跡が明瞭に残る。36は、体部内外面と底部外面にハケメ調整を施す。底径8.9cm。20～28は、概ね11世紀末から12世紀初めを中心とする時期に比定され、弥生土器は、30、33、36が中期後半、29、31、32、34、35は後期から庄内式に比定される。

溝SD04出土遺物（第32図） 土師器皿（37～39）、瓦器の椀（40）、鉢（42）、須恵器甕（43）、陶器（41）がある。37は、口径7.7cm、器高1.7cm。内面の一部は強いナデにより凹み、外面は押された部分に平行する筋状の圧痕が付く。乾燥時に置かれた敷物がスタンプされたと考えられる。38は、口径9.2cm、器高1.8cm。39は、口径11cm、器高2cm。40は、口径11.6cm、器高4.2cm。内面と見込みに粗いヘラミガキを施す。高台は擦り付けられた粘土がひも状に細々と巡る。41は、内面に灰釉が付着する。貼り付け高台。古瀬戸の平碗と考えられる。42は、外面に菊花文のスタンプを押印する。外面は丁寧なヘラミガキ、内面は縦方向に粗いヘラミガキを施す。43は、外面に格子目タタキを施し、内面は同心円の當て具痕が残る。頸部に黒色物が付着する。これらの遺物は、鎌倉時代から南北朝期に比定される。

井戸SE05出土遺物（第33・39図） 第2層と第3層に大量の遺物が含まれていたが、小片が多く図化できたものは少ない。土師器皿（44～47）、青磁（48）、平瓦（49）がある。44は、口径7.5cm、器高1.5cm。45は、口径8.1cm、器高1.2cm。両者は内面ナデ調整後も全面にハケメが残る。46は、口径9.4cm、器高1.5cm。47は、口径12cm。京都の土師器皿の白色系椀形タイプ。48は、中央の筒状部分と疊付を除いて全面施釉する。龍泉窯と考えられるが、器形については手掛かりがない。49は、平瓦類凸面の瓦当文様の一部。鋸歯状の文様がある。これらの遺物は、室町時代前期に比定される。

211と212は、井戸底に残る方形木枠の残存品。全長約70cm。両端に穴を開けており、その間隔



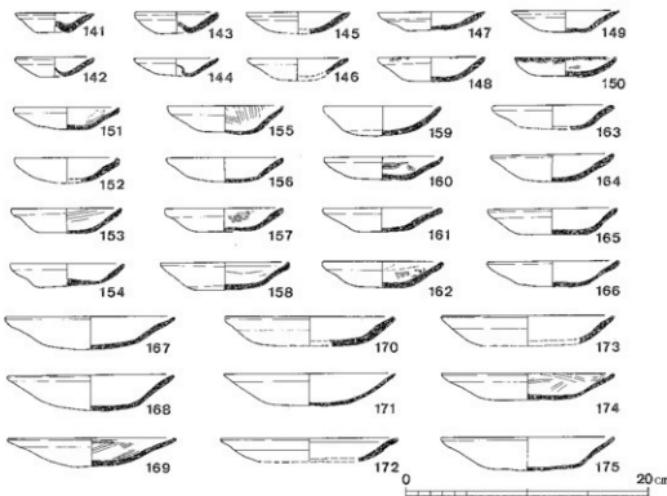
第34図 2 トレンチ出土中世土師器皿実測図-1 (1/4)

は約40cm。213・214は、第5層出土。213は、1カ所穴をあけている。214は、曲物底板。1カ所に穴をあけている。

#### 包含層出土遺物

中世土師器皿（第34～36図） 2トレンチでは、多量の石礫と炭、焼土片とともに多量の土師器皿が出土した。造構出土の皿を除く破片数は6786片である。土師器皿の分類にあたっては、多量に出土した戦国期を中心形態、胎土、調整手法などから乙訓在地産、京都産白色系、京都産白色系を模倣した乙訓在地産の3種類に分けることを目標に試みた。

乙訓在地産は、いわゆる本地域から出土する上師器皿の大多数を占めるものである。ここでは小皿を50～97と113～139に二分しており、98～112については胎土に特徴あるものを両者から抽出した。概ね16世紀前半代に比定され、藤孝が城を改修する元亀2（1571）年以前と考えている。50～97は、最も多く出土している。口縁部の形態は、外反気味にひらいて底部との境目に稜をもつ部分がある一方、そのまま丸く立ち上がるものもある。同一個体であってもナデ調整が全体に均等に施されたものは少なく、部分によって形態に差異がみられる。口径は6.2cm～8.1cm。最も多いのは6.5cm～7.5cmである。器高は、1.2cm～1.8cmであるが、1.5cm台が多い。調整は、内面



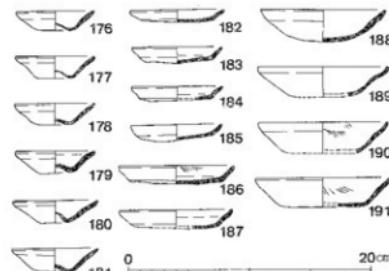
第35図 2トレンチ出土中世土師器皿実測図-2 (1/4)

および口縁部をヨコナデ調整、底部はオサエ未調整。色調は、橙褐色～淡褐色。主な特徴は、胎土に赤色粒子を含むこと、内面にハケメを残すもの（95）が少なからずあることである。90の外面には十字形に紐痕跡が残る。別に紐を引き抜いた痕跡がある皿もある。97は口縁端部に油煙が付着する灯明皿。113～139は、形態は前者と共に通

するが、比較的器壁が厚いものである。口 緑部のナデ調整はほぼ均等に施されており、口縁部は比較的短く立ち上がる。口径は、6.3cm～7.8cm。最も多いのは7cm台前後である。器高は、1.3cm～1.9cmであるが、1.5cm台が多い。調整は、内面および口縁部をヨコナデ調整、底部はオサエ未調整。色調は、ほとんど個体差のない灰白色を呈する。胎土に赤色粒子を含む。

98～112は、胎土に雲母片が目立つものを集めた。形態や法量は、基本的に前者と同じものが多いため、色調は赤褐色、灰褐色、黄橙色まで種々みられる。140は、小さな片口をもつ最小型の皿。

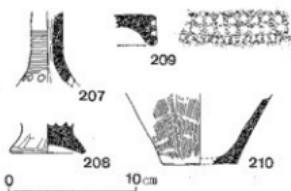
京都産白色系を模倣した乙訓在地産の皿には、ヘソ皿（141～144）、中皿（145～166）と大皿（167～175）がある。141～144は、口径6.6cm～7cm。器高1.5cm～1.8cm。凸形に押し上げられた各個底部には爪形が残る。142～144は胎土に赤色粒子を含む。145～149は、口径8.5～9cm。器



第36図 2トレンチ出土中世土師器皿実測図-3 (1/4)

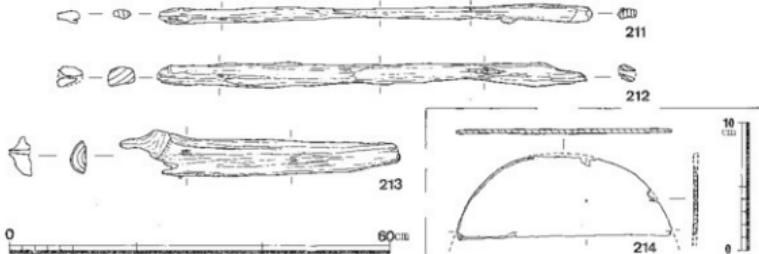


第37図 1・2 トレンチ出土中世遺物実測図 (1/4)



高1.6~1.8cm。胎土に雑多な鉱物粒子が少なく、色調は灰白色から淡黄色を呈する。口縁部の歪みも少ない。148と149は、口縁部に油煙が付着する灯明皿。同種のタイプの皿は少ない。150は、口径8.5cm。器高1.6cm。形態と技法は基本的に小皿と共通する。胎土に赤色粒子を含み、内面にハケメが残る。色調は灰白色。残存する口縁部全体に灯明による油煙が付着する。151~166は、平底から屈曲してひらく口縁部をもち、端部はつまみあげるものが多い。口径8.8cm~11cm。器高1.9cm~2.4cm。154は、胎土に雲母片が多く、色調も灰黄色を呈する。その他の中皿は乙訓在地産の小皿と胎土や色調が類似しており、内面にハケメ調整が残るものもある。167~175は、平底から屈曲してひらく口縁部をもつ。口径13.8cm~14.8cm。器高2.2cm~2.8cm。胎土や色調、調整などはその他の中皿と同じである。172は京都産の可能性がある。

室町時代前半期の遺物としては、ヘソ皿(176~181)、小皿(182~185)、大皿(186・187)、白色系の楕形タイプ(188~191)がある。ヘソ皿は、口径6.5~7.2cm。器高1.7~2cm。色調は白色系と類似するが、胎土に赤色粒子を含む。小皿は、口径7.5~7.9cm。器高1.1~1.4cm。口縁部の

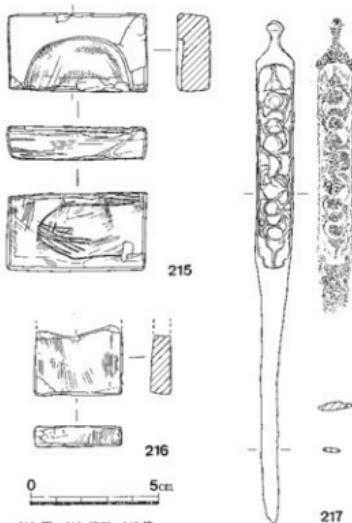


第39図 井戸SE05出土木製品実測図 (1/8 \* 1/4)

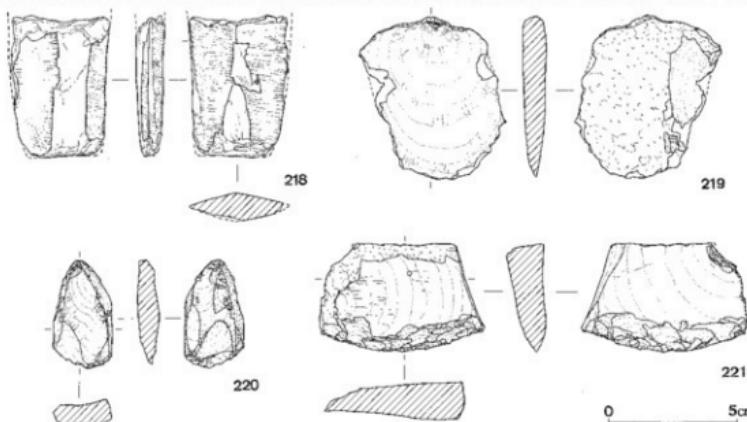
ナデ調整は均等に施されており、底部との境目は外反する。184は、底部外面に平行する筋状の圧痕が付く。大皿は口径9.4~9.6cm。器高1.6cm。形態と胎土、色調は小皿と類似する。186は、内面にハケメ調整が残る。白色系の楕円タイプは、口径10.4~11.2cm。器高2.5~2.8cm。形態は、ナデ調整の強弱から口縁部が丸くひらくもの（188）と、やや屈曲してひらくもの（189~191）がある。胎土に赤色粒子を含み、内面にハケメ調整を残す。

他の中世遺物（第37図） 土器器皿以外の主な遺物について述べる。192は、内面に密なヘラミガキを施す。外面は摩滅する。土壌構築土出土の瓦器碗と同型式。193は、溝S D04出土の碗と同型式。194は、高台内面に「檢」とみられる墨書がある。197は、小さな玉縁をもつ。198は、内面と体部外面に施釉する。199は、高台内面を除いた内外面に施釉する。200は、綾杉のタクキメを施す表体部片。201・202は、香炉。それぞれ外面に菊花と渦巻き状のスタンプを押す。203は、常滑焼甕。外面に濃緑色の釉が付着する。204は、備前焼大甕。205は、軒丸瓦外区内縁の珠文。206は、軒平瓦。唐草の一部がみえる。

弥生土器（第38図） 高杯脚部（207・208）、壺（209）、甕（210）がある。207は、筒状の脚部に櫛描文を施す。脚部に10カ所の円孔を施す。209は、口縁部を拡張させた端面に円形の刺突



第40図 石製品・銅製品実測図（1/2）



第41図 石器・剣片実測図（1/2）

文を、下端に刻み目をいれる。このほかに、生駒山西麓産の小片がある。207は、後期から庄内式。その他のものは中期後半に比定される。

石製品・銅製品（第40・41図） 砥石（216）、笄（217）、磨製石剣の柄部（218）、剝片（219・220）、削器（221）がある。216は、2トレンチ上面の堆積層出土。細かい粒子の仕上げ砥で両面使用する。珪質頁岩または粘板岩製。218は、断面菱形で両面を研磨する。柄の部分で折れている。粘板岩製。219・220は、礫面の残る剝片。サヌカイト製。221は、両側から刃をついている。背部に礫面が残る。サヌカイト製。

なお217は、土塁開削溝出土。真ん中あたりで反り曲がっている。長さ約22cm。銅製。

## 5 まとめ

今回の調査は、一昨年度の調査で予測した内容を修正する新たな成果が得られた。当初、土塁上の凹みが堀の延長部分と合致することから、土塁は堀を埋め戻して造営されたとした点は、堀が土塁の手前で終息しており、相互に重複関係のないことが判明した。一方、土塁上の凹みについては後世に開削された跡であることが明らかとなった。

堀については、すでに織田信長の旧二条城出土の土師器皿と類似する皿が堀底から出土しており、少なくとも勝龍寺城を改修した元亀2（1571）年段階に堀が存在したことは間違いない。しかも、土塁、空堀と連携するような整然とした配置は、計画的に造営された可能性が高いと考えられる。堀から出土した遺物は、概ね山崎合戦で落城した天正10（1582）年ごろまでのものを含んでおり、堀上面の包含層は17世紀前葉の遺物を含む。

土塁上をV字形に掘り込む開削溝については、全く予想外であった。開削された時期は、笄のほかに遺物が乏しくおまかに江戸時代後期ごろと思われる。なお、今回検出した堀と土塁の現況を比較すると、菊一福荷社が鎮座する土塁南斜面が東西両側の土塁よりやや南に張り出していることが見て取れる。祠と参道を普請する際に土塁の上が流れ落ちたのではないかと考えられる。

戦国期の土師器皿については、拠点的な城郭である勝龍寺城から出土する多量の土師器皿が乙訓地域の特徴を見定めるうえで重要であると考えている。

注1) 岩崎 誠「勝龍寺城」『長岡京市センター報告書』第6集 1991年

2) 『日本城郭大系』第11巻 新人物往来社 1980年

3) 桑原公徳『地籍図』学生社

4) 「資料 勝竜寺城跡」乙訓の文化遺産を守る会編

5) 注4と「勝竜寺城跡」京文懇だよりNo.11京都の文化遺産を守る懇談会 1984年に掲載

6) 岩崎 誠「右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第15冊 1985年

岩崎 誠「右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第17冊 1986年

7) 原 秀樹「右京第631次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

8) 原 秀樹「右京第608次調査概要」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

9) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財團法人

京都市埋蔵文化財研究所 1996年

付表3 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしづんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡市文化財調査報告書
副書名	
卷次	第42冊
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中島 皆夫、小畠 佳子、原 秀樹、中尾 秀正
編集機関	財団法人 長岡市埋蔵文化財センター
発行機関	長岡市教育委員会
所在地	〒617-8501 京都府長岡市開田一丁目1番1号
発行年月日	2001年3月30日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（右京第661次） 友岡遺跡	長岡市 友岡西山14-7地	26209	107 97	34度54分 54秒	135度41分 29秒	20000106 20000125	99m <sup>2</sup>	小規模 開発
長岡京跡（右京第675次） 開田遺跡	長岡市 開田四丁目60-4	26209	107 80	34度55分 10秒	135度41分 51秒	20000601 20000630	184m <sup>2</sup>	小規模 開発
長岡京跡（右京第681次） 神足遺跡 神足城跡 中世勝龍寺城跡	長岡市 東神足二丁目7	26209	107 83 82 84-1	34度54分 59秒	135度42分 19秒	20000904 20001031	88m <sup>2</sup>	遺構確認

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第661次）	都城	長岡京期	溝	土師器、須恵器、 土馬	
友岡遺跡	集落	平安～鎌倉時代	獨立柱建物 流路状遺構	土師器	
長岡京跡（右京第675次）	都城	長岡京期	溝、樋、辙	土師器、須恵器、 土馬、瓦、墨書き 器、木製品	六条条間南小路両側 溝を確認
開田遺跡	集落	縄文時代～ 古墳時代前期	自然流路	縄文土器、石製品	
長岡京跡（右京第681次）	都城	長岡京期		土師器、須恵器	
神足遺跡	集落	弥生、古墳時代		弥生土器、石器、 網片	
神足城跡	城館	室町時代	井戸、溝、柱 穴	土師器、須恵器、 瓦器	
中世勝龍寺城跡	城館	室町、桃山時代	堀、土塁	陶器、輸入陶磁器、 石製品、銅製品、 瓦	中世勝龍寺城の堀と 土塁構築状況を確認

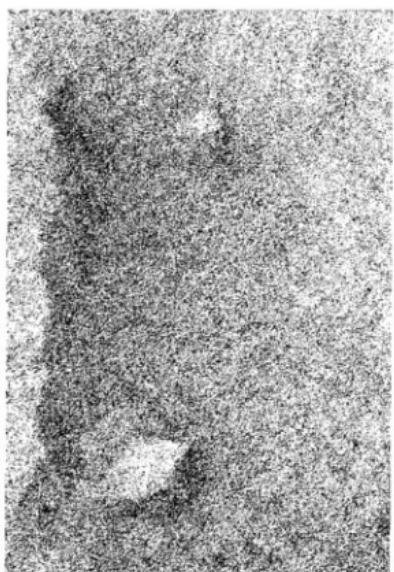
# 図 版

長岡京跡右京第661次調査

図版  
一



(1) 調査地全景（東から）



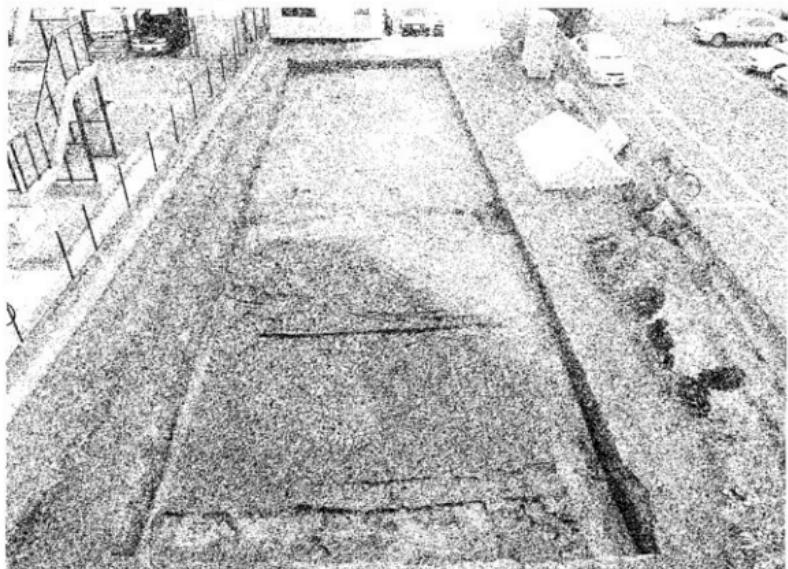
(2) 溝SD04遺物出土状況（西から）



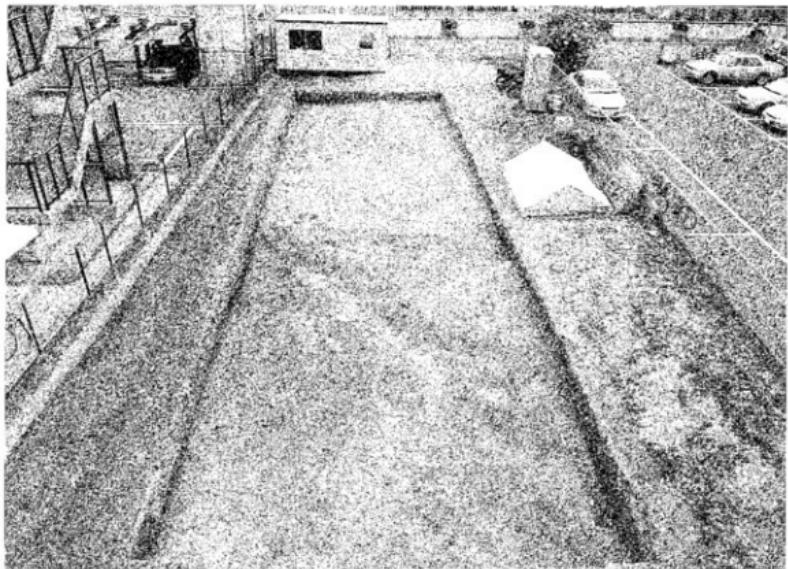
(3) 溝SD04（西から）

長岡京跡右京第675次調査

図版  
一



(1) 調査区全景－1（北から）



(2) 調査区全景－2（北から）

長岡京跡右京第675次調査

図版三



(1) 六条条間南小路（南から）



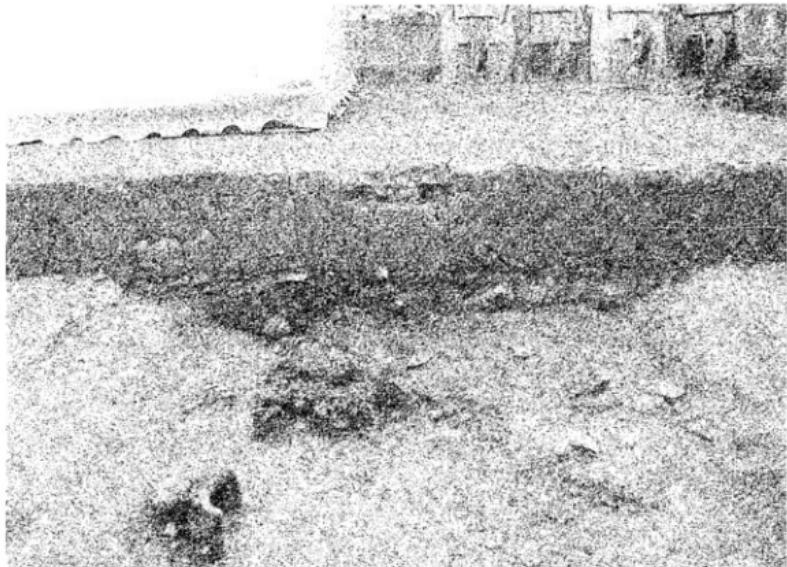
(2) 溝SD67501（西から）



(3) 溝SD67502（西から）

長岡京跡右京第675次調査

図版四



(1) 溝SD67502断面（東から）



(2) 自然流路SR67505土層堆積状況（南から）

長岡京跡右京第675次調査

図版五



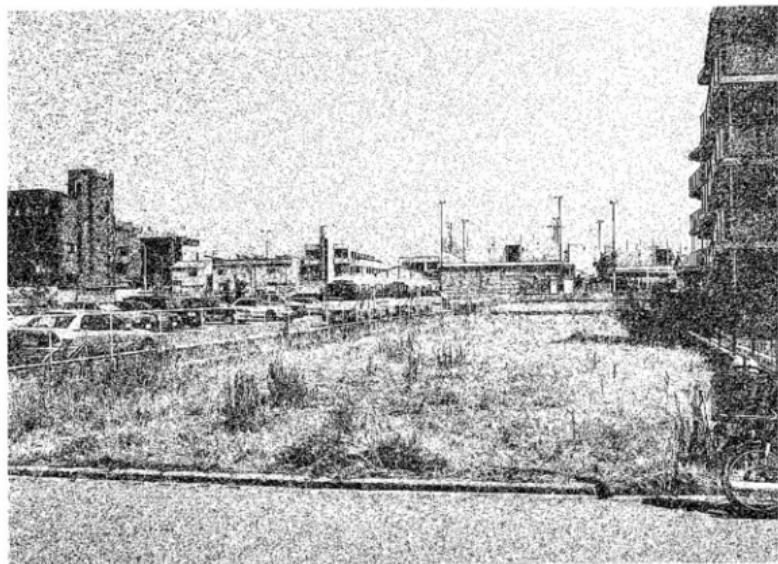
(1) 南西拡張区（東から）



(2) 調査区土層堆積状況（西から）

長岡京跡右京第675次調査

図版六



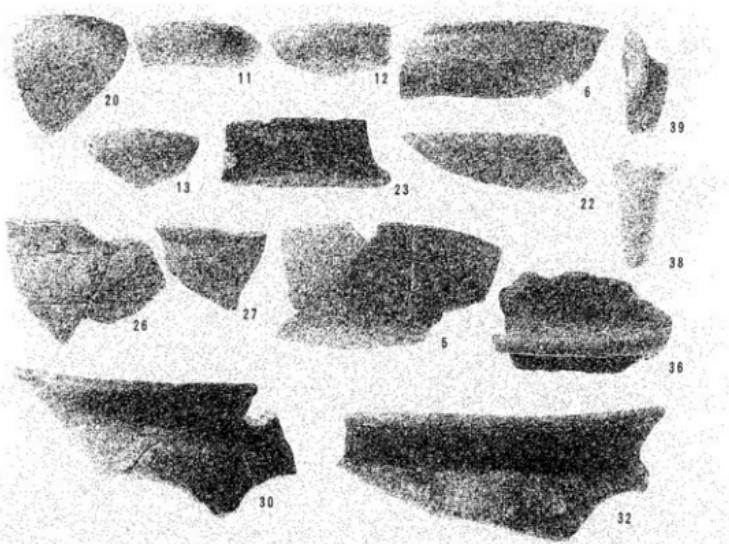
(1) 調査前風景（南から）



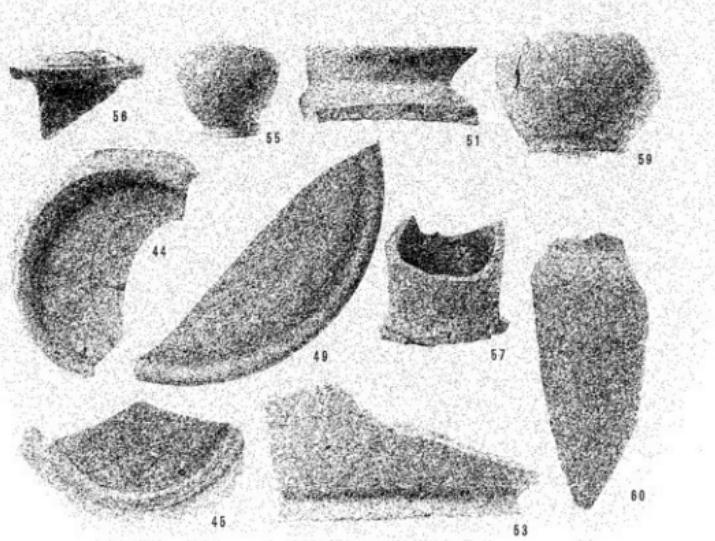
(2) 調査後風景（南から）

長岡京跡右京第675次調査

図版七



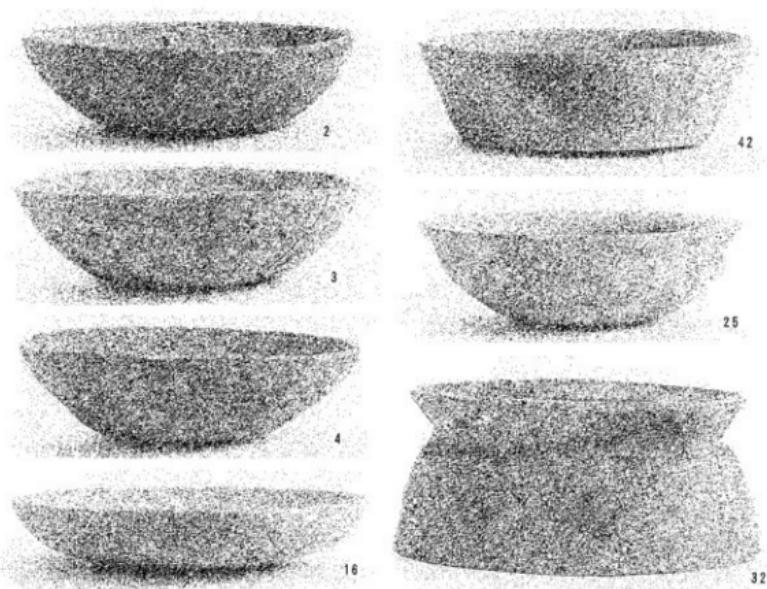
(1) 溝SD67502出土遺物－1



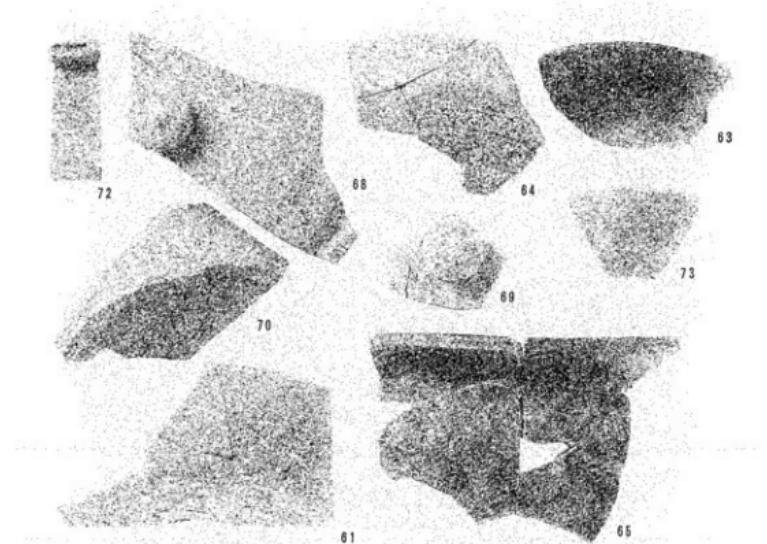
(2) 溝SD67502出土遺物－2

長岡京跡右京第675次調査

図版  
八



(1) 溝SD67502出土遺物 - 3



(2) 溝SD67501・第5層出土遺物

長岡京跡右京第675次調査

図版九



66

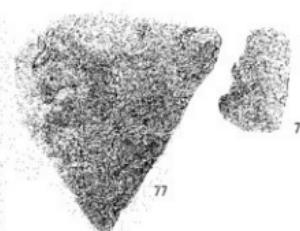


62

(1) 溝SD67501出土遺物



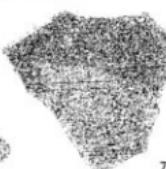
76



77



79



78

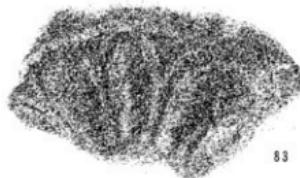


80



81

(2) 墨書き土器



83



84



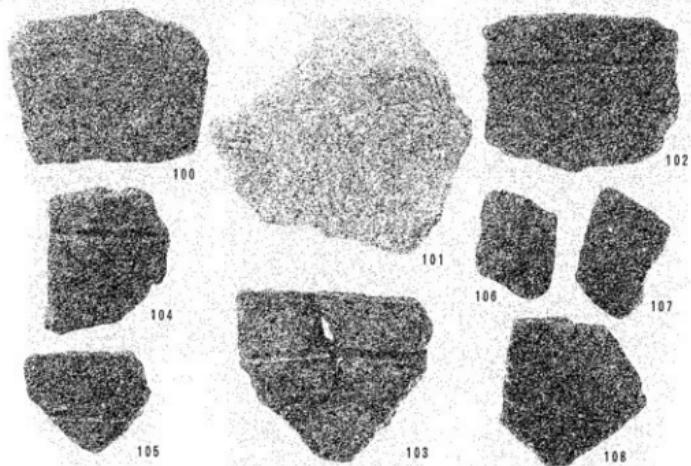
112

(3) 軒丸瓦

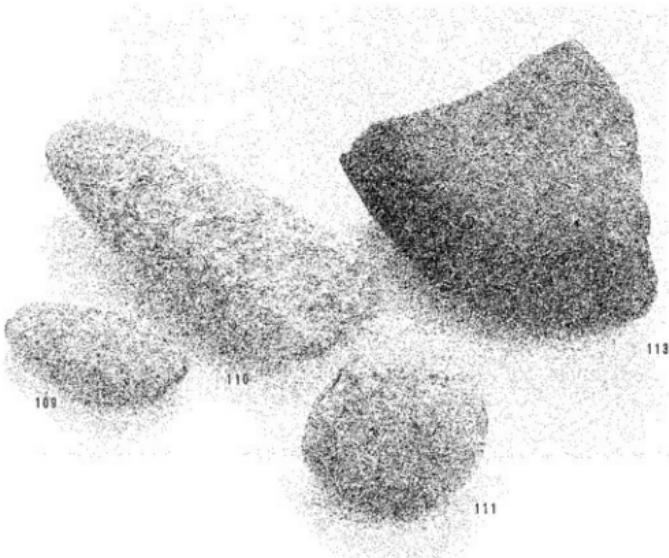
(4) サヌカイト剥片

長岡京跡右京第675次調査

図版一〇



(1) 繩文土器



(2) 石製品



(1) 調査前の土塁（南から）



(2) 1トレンチ完掘状況（南東から）

長岡京跡右京第681次調査

図版  
一二



(1) 土塁の断ち割り状況（南から）



(2) 1・2トレンチ遠景（南東から）



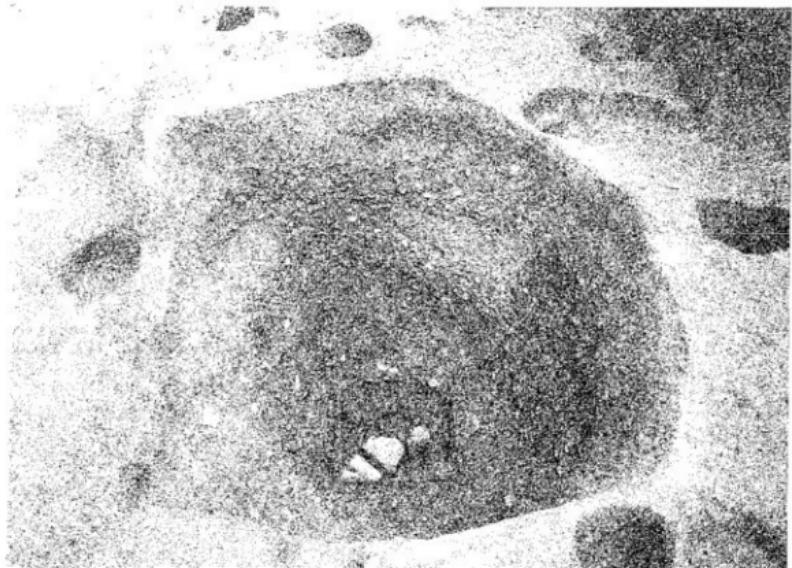
(1) 2 トレンチ上面の石礫（南東から）



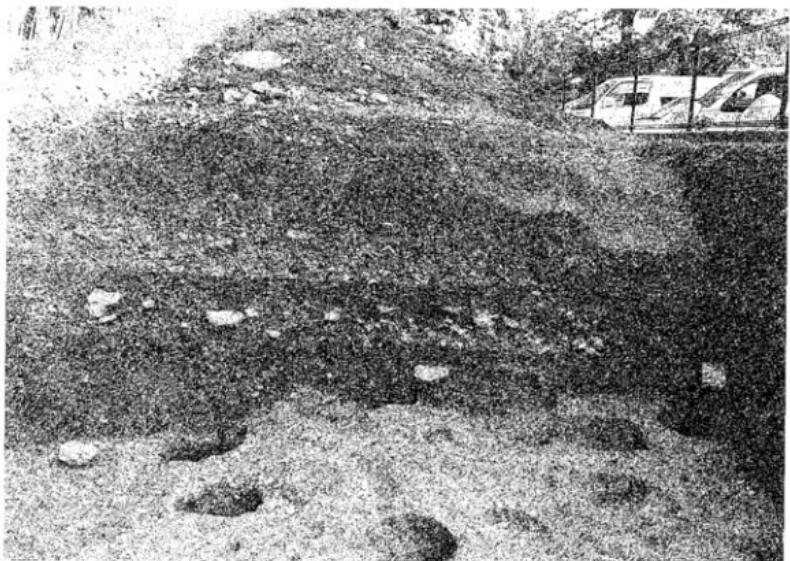
(2) 2 トレンチ下面の遺構全景（西から）

長岡京跡右京第681次調査

図版  
一四



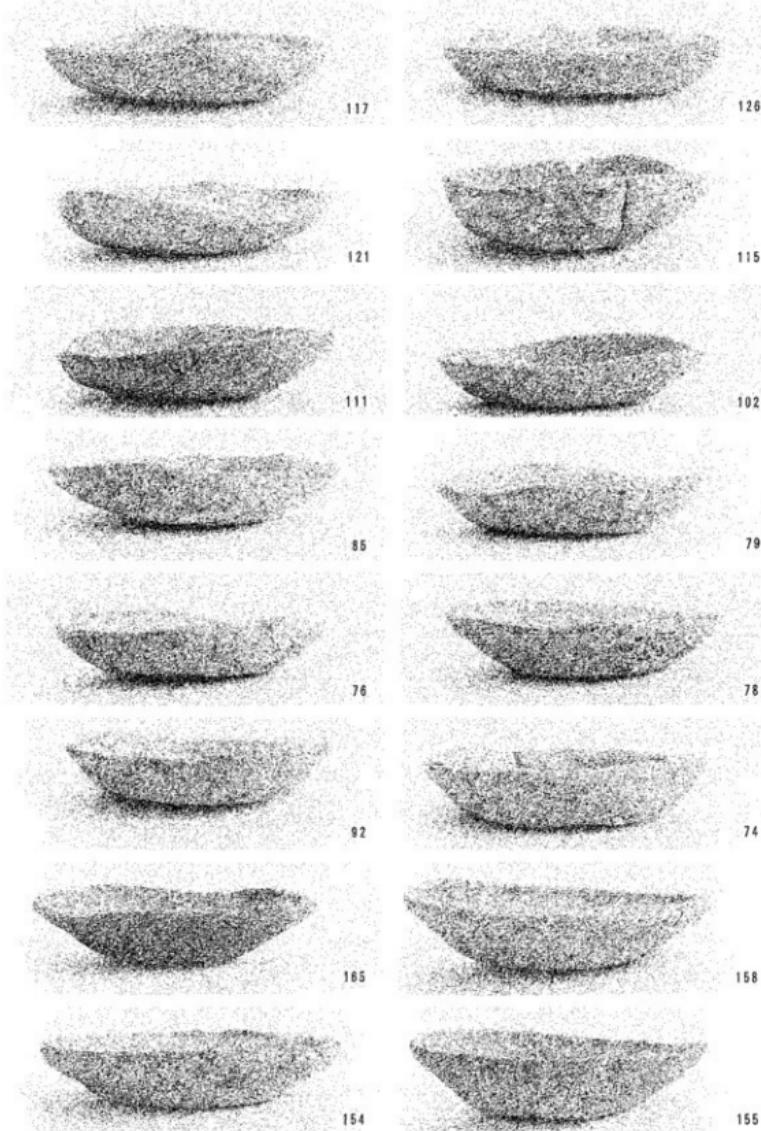
(1) 井戸SE05全景（西から）



(2) 2 トレンチ東壁の上層（西から）

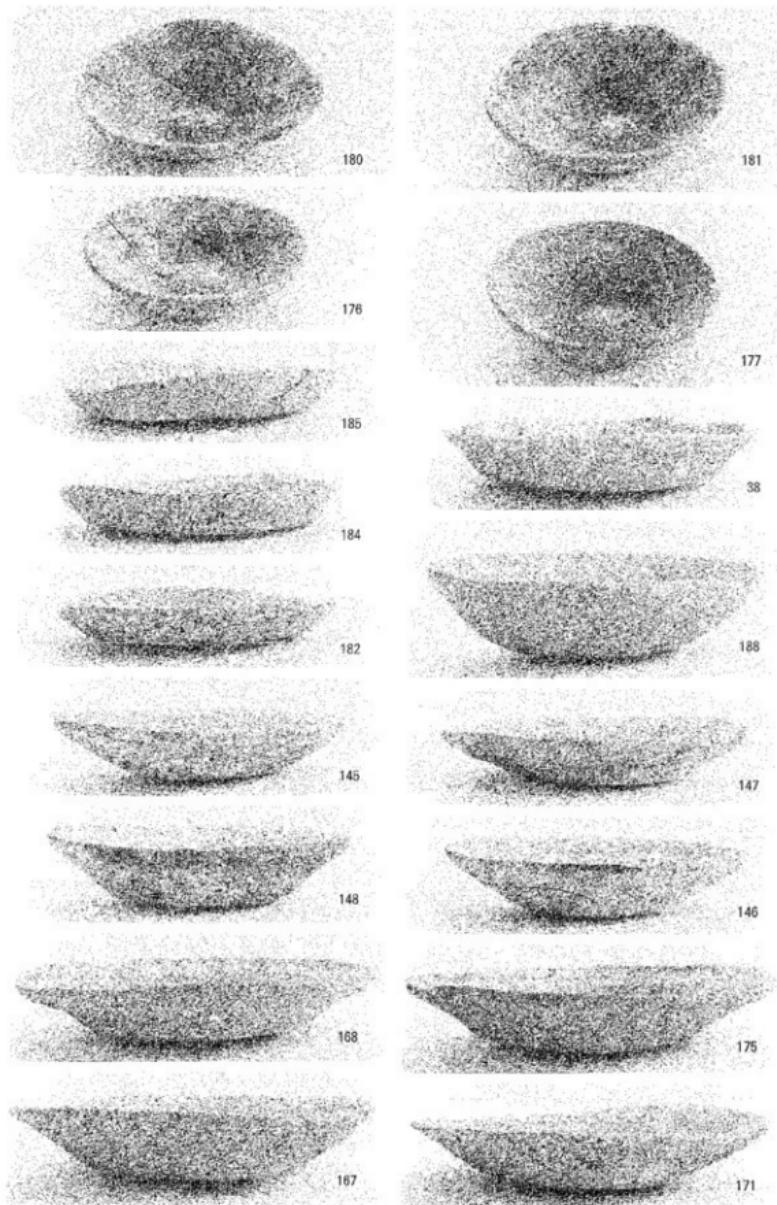
長岡京跡右京第681次調査

図版  
一五



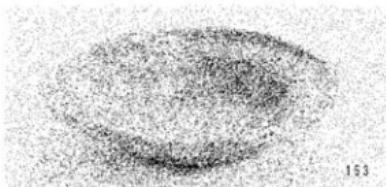
長岡京跡右京第681次調査

図版  
一六



長岡京跡右京第681次調査

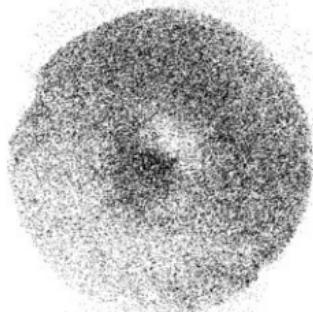
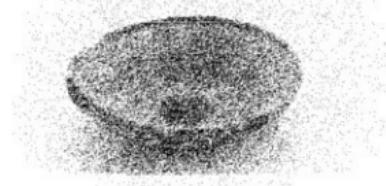
図版  
一七



153



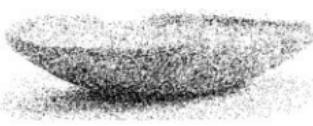
44



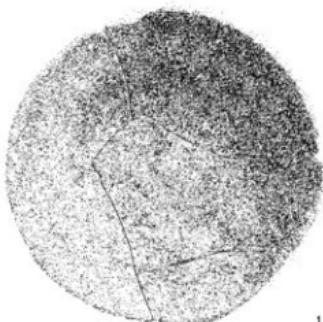
143



90



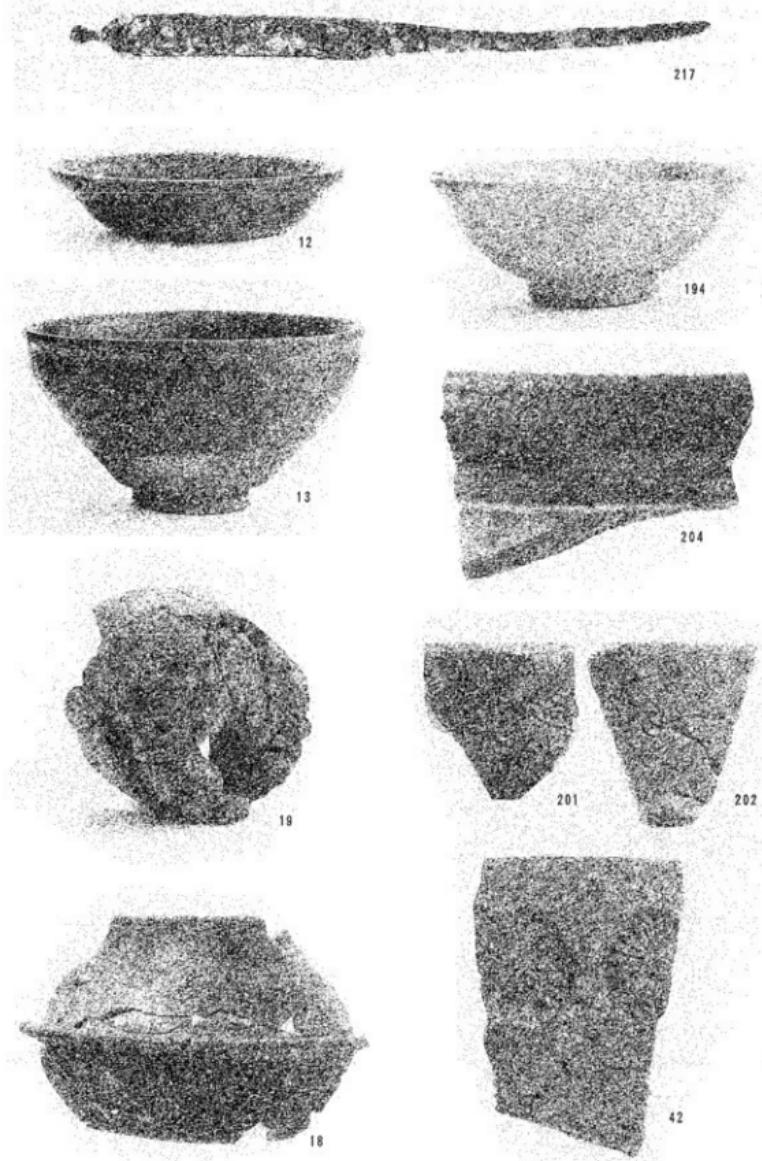
85



160

長岡京跡右京第681次調査

図版  
一八



瓦器・陶器・白磁・金属製品・土製品

## 長岡京市文化財調査報告書 第42冊

平成13（2001）年3月26日 印刷

平成13（2001）年3月30日 発行

- 編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター  
〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1  
電話 075-955-3622(代) FAX 075-951-0427
- 発 行 長岡京市教育委員会  
〒617-8501 京都府長岡京市開田一丁目1番1号  
電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400
- 印 刷 株式会社ぎょうせい